

平成20年度

**学生ボランティア活動支援・促進の集い
報告書**

平成21年3月



JASSO

独立行政法人

日本学生支援機構

Japan Student Services Organization

目 次

開催概要	1
プログラム	2
開会挨拶	4
第1部 全体会	
1. 講演	
「文部科学省におけるボランティア活動の推進について」	5
2. パネルディスカッション	
「大学におけるボランティアコーディネーションの課題と展望～教育の新しい動向とコーディネーターの役割～」	14
・ 質疑応答	27
第2部 分科会	
第1分科会 「大学におけるサービスラーニングの可能性」	39
第2分科会 「ボランティアセンターのつくりかた」	41
第3分科会 「大学と地域を結ぶボランティアコーディネーション」	45
第4分科会 「授業におけるボランティア学習カリキュラムづくり」	47
第5分科会 「学生が結ぶボランティアネットワーク」	51
参加者アンケート	
集計結果 総括表	55
アンケート様式	59
参加者内訳	61
参加大学・機関等一覧	62

開催概要

◆ 趣 旨

今、大学等において、学生が行うボランティア活動等を積極的に奨励するため、正規の教育活動として、学内外における社会体験・地域活動を視野に入れた取り組みが社会的にも注目されています。また、さまざまな場において、大学等とボランティア関係団体との情報交換や緊密な連携・協力が強く望まれています。

このような状況を踏まえ、大学と関係機関・団体の担当者間の連携・協力をさらに推進するために、それぞれの具体的な取り組み事例や課題等についての情報や意見交換等を行います。

◆ 主 催

独立行政法人 日本学生支援機構

◆ 協 力

文部科学省

◆ 日 時

平成 20 年 12 月 5 日（金） 10:00～17:00

◆ 会 場

東京国際交流館 プラザ平成

東京都江東区青海 2-79 TEL : 03-5520-6001

◆ 対 象

全国の大学・短期大学及び高等専門学校のボランティア活動支援業務担当教職員、ボランティア関係機関、団体担当者及び学生

◆ 企画実行委員会委員

小 拔 隆	東北福祉大学ボランティアセンター	コーディネーター
栗 田 充 治	亜細亜大学国際関係学部	教授
興 栢 寛	昭和女子大学人間社会学部特任教授・コミュニティサービスラーニングセンター長	日本ボランティア学習協会代表理事
藤 田 久 美	山口県立大学社会福祉学部	准教授
松 瀬 房 子	立命館大学ボランティアセンター	主事
小 見 夏 生	独立行政法人日本学生支援機構	学生生活部長

※機構職員除く委員 50 音順

プログラム

◆ 開 会 10:00~10:10

- ・ 挨拶 独立行政法人 日本学生支援機構 理事 大 貫 賢 一
- ・ オリエンテーション

◆ 第1部 全体会 10:10

1. 講 演 10:10~10:45

「文部科学省におけるボランティア活動の推進について」

出 口 寿 久 (文部科学省生涯学習政策局社会教育課 地域・学校支援推進室 室長補佐)

2. パネルディスカッション 10:45~12:40

「大学におけるボランティアコーディネーションの課題と展望～教育の新しい動向とコーディネーターの役割～」

ボランティア活動は、学生がよりよい自己を探求し、地域社会やグローバル社会の社会課題を学び、さらには、知識や技術と社会貢献とを融合させた新たなアカデミズムを創出するために、大学教育になくてはならないものとなっています。そうした教育ニーズの変化に応えるために、ボランティアコーディネーションはいかにあるべきかを、教育最前線で活躍するコーディネーターたちが語り合います。

司 会：興 梶 寛 (昭和女子大学人間社会学部特任教授・コミュニティサービスラーニングセンター長／日本ボランティア学習協会代表理事)

パネリスト：李 永淑 (明治学院大学ボランティアセンター コーディネーター)

武田 直樹 (筑波学院大学OCP推進室 社会力コーディネーター)

松瀬 房子 (立命館大学ボランティアセンター 主事)

－ 昼 食 － 12:40~13:40

◆ 第2部 分科会 13:40~17:00

第1分科会「テーマ：大学におけるサービスラーニングの可能性」

コーディネーター：興 梶 寛

(昭和女子大学 人間社会学部特任教授・

コミュニティサービスラーニングセンター長／日本ボランティア学習協会代表理事)

21世紀は「知識基盤社会」の時代であるといわれています。絶え間ない競争と技術革新やグローバル化のなかで、いま大学教育はどのような新たな「知」と「技術」を探求するのか。アカデミズムとボランティア活動の教育力とを融合させ、地域社会やグローバル社会をキャンパスに学ぶ「サービスラーニング」(Service Learning)の取り組みを探ります。

第2分科会「テーマ：ボランティアセンターのつくりかた」

コーディネーター：藤田 久美（山口県立大学 社会福祉学部 准教授）

大学ボランティアセンターは学生と地域を結ぶ重要な架け橋であり、学生支援と地域貢献という大学の果たすべき2つの目的を達成することが求められます。学生と地域の実態及び大学の規模や予算など、センターの設置・運用にあたって検討する課題を整理します。

また、学生のボランティア活動支援の重要性を再考しつつ、学生の実態やニーズに対応したセンターのあり方を具体的に考える機会とします。さらに、ボランティアセンターをつくるプロセスから学生力を活かしていく方法についても考えてみたいと思います。

第3分科会「テーマ：大学と地域を結ぶボランティアコーディネーション」

コーディネーター：松瀬 房子（立命館大学 ボランティアセンター 主事）

大学ボランティアセンターは、地域が抱えるニーズへの対応と同時に、学生の教育・成長という視点を持つことが求められます。この分科会では、大学と地域とがつながるうえで大切なことや、大学側・地域側の課題などを話し合います。学生にとって学び・成長につながり、地域にとって役立つボランティアコーディネーションとは？みなさんとともに考えたいと思います。

第4分科会「テーマ：授業におけるボランティア学習カリキュラムづくり」

コーディネーター：栗田 充治（亜細亜大学 国際関係学部 教授）

学生・教職員のボランティア活動など、大学の地域連携や社会貢献の取組みが盛んになっています。学生のボランティア活動を促進する意義は、その教育力にあります。

各大学でのボランティア活動を組み込んだ授業の運営事例や、教職課程などにおける学校支援ボランティアの促進事例、評価や単位認定、リスク回避・リスク管理の方法など、日頃の疑問や課題を解決するヒントを持ち帰ることをめざします。

第5分科会「テーマ：学生が結ぶボランティアネットワーキング」

コーディネーター：小 抜 隆（東北福祉大学 ボランティアセンター コーディネーター）

学生が主役の分科会です。ボランティア活動の魅力や喜び、日頃の悩みや工夫、将来の展望など、ともに語り合しましょう。

大学間のネットワークづくりとなる分科会です。ボランティア活動経験のある方もない方もご参加ください。

— 情報交換会 — 17:20～18:20

開会挨拶

独立行政法人 日本学生支援機構 理事 大貫 賢一

日本学生支援機構理事の大貫でございます。

「平成 20 年度 学生ボランティア活動支援・促進の集い」を開催するにあたり、主催者として一言ご挨拶を申し上げます。

本日は全国各地から多数の皆様にご参集いただき、誠にありがとうございます。また、文部科学省生涯学習政策局 社会教育課の出口寿久地域・学校支援推進室 室長補佐をはじめ、パネルディスカッションや分科会をご担当いただく諸先生方には、大変お忙しい中、ご出席・ご協力いただき厚くお礼申し上げます。



さて、日本学生支援機構は、平成 16 年 4 月に発足以来 5 年目を迎えております。

主な業務である、奨学金貸与事業、留学生支援事業、そして学生生活支援事業を通じて、次の世代の社会を担う、豊かな人間性を備えた、創造的な優れた人材を育成するとともに、国際理解・交流の推進を図ることを目的としております。今後とも引き続き、皆様のご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

さて、学生ボランティア活動につきましては、阪神・淡路大震災や新潟県中越地震を契機として、地域社会における学生のボランティア意識も急速な高まりを見せておりますし、国内外を問わず学生のボランティア活動は様々な分野で展開されているところであります。このような活動の積み重ねの結果、学生のボランティア活動は地域社会から頼られ、益々期待されるものと考えております。

一方、これからの大学等は地域貢献、地域連携を推進していく必要があると指摘されております。学生ボランティア活動等を積極的に奨励するため、正規の教育活動として学内外における社会体験・地域活動を視野に入れた取組みが社会的にも注目されております。

このような状況を踏まえ、学生のボランティア活動を、教育機関や受入機関、ボランティア団体、地域の行政機関と緊密に連携しながら、支援・促進していくことは重要な課題であると考えております。また、本年 2 月の中央教育審議会生涯学習分科会「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策」(答申)においては、各個人の学習成果を生かす機会の充実のための具体的方策として、誰もが参加できるようにするために、地域におけるボランティア活動支援センターの在り方を検討し、支援機能の充実を図ることの重要性が述べられているところです。

本日の「集い」におきましては、全体会や分科会を通じて、意見や情報の交換をしていただき、様々な課題の解決に寄与できれば幸いと考えております。

最後になりましたが、この集いの開催にあたり多大なご協力をいただきました企画実行委員の各先生方に厚くお礼を申し上げますとともに、この集いをご参加の皆様方にとって実り多いものとなるよう祈念いたしまして、ご挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございました。

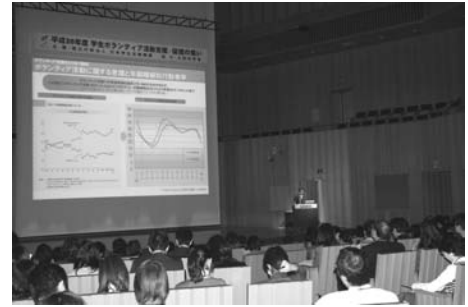
第1部 全体会

1. 講演

「文部科学省におけるボランティア活動の推進について」

文部科学省 生涯学習政策局 社会教育課
地域・学校支援推進室 室長補佐 出口 寿久

おはようございます。ご紹介いただきました文部科学省の出口でございます。本日お集まりの皆様方におかれましては、日ごろからボランティア活動の普及・発展にご尽力をいただいておりますことを、この場を借りまして、お礼を申し上げます。また、本日は、貴重な皆様方の時間をいただき、お話しさせていただきますことを大変うれしく思っております。



それでは、時間も限られておりますので、早速説明に入らせていただきます。

今日は、『文部科学省におけるボランティア活動の推進について』ということでお話させていただきます。まず「ボランティア活動を取り巻く社会の動向」について、次に、政府及び文部科学省でこれまでボランティア活動の推進に取り組んでおりますが、その「経緯と背景」について、最後に、今現在、私どもで取り組んでおります「ボランティア活動の取組」について、大学における活動の状況なども含めてお話をさせていただきます。

まず「ボランティア活動を取り巻く動向」について、データを使ってお話をさせていただきます。地域とのつながりが薄れてきているということが、大きな問題となっている現代社会におきましては、ボランティア活動を含めた社会貢献への意識は、年々高まっていると言われております。左のグラフは、内閣府が実施しております「社会意識に関する世論調査」から作成されたものですが、社会のために役に立ちたいと思っている人が、平成 19 年度には 62.6%ということで、年々高まっていることがお分かりいただけると思います。

ところが、ボランティア活動を例にとってみますと、平成 18 年度の一年間にボランティア活動を行った人は 2,972 万人ということで、その行動者率は 26.2%に過ぎず、5 年前に比べて 2.7 ポイント低下しているという結果になっております。これは、総務省が平成 18 年度に行った社会生活基本調査からの資料「年齢・階級別のボランティア活動の行動者率」を示したグラフで、平成 13 年と平

成 18 年を比較しておりますが、それを見ましても、すべての年齢において減少傾向にあるということがお分かりいただけると思います。年齢・階級別で比較してみますと、40 歳から 44 歳の方々が、33.6%と最も高く、逆に 25 歳から 29 歳は、15.8%と最も低くなっております。

さらに 2003 年に、野村総合研究所で行ったボランティア活動に関するアンケートにおきましては、地域活動への参加率が分野ごとにまとめられており、その参加状況を細かくつかむことができるかと思えます。地域の活動への参加は、総じて高くないと言えらると思えますが、なかでも 10 代、20 代の参加というものが、低くなっているということがお分かりいただけます。

このような状況の原因を、内閣府が平成 15 年度に行っております「国民生活選好度調査」の結果から考えてみますと、左の円グラフにありますように、地域の活動への参加を妨げる要因といたしましては、「活動時間がない」、「関心がない」という理由が 51%になっております。しかし、右のグラフを見ていただいても分かりますように、「きっかけや情報さえあれば参加してみたい」と考えている方々が、かなりおられるということがお分かりいただけます。その辺りの課題を解決できれば、ボランティア活動への参加を今まで以上に期待できるものと思えます。

続きまして、「ボランティア活動の経緯と背景」についてです。政府及び文部科学省で取り組んでおります状況を法律や答申等を参考に説明させていただきます。

平成 12 年の 3 月に、教育改革について幅広い検討を行っていくために設置されました「教育改革国民会議」の最終報告が同年の 12 月に提出されております。「教育改革国民会議報告－教育を変える 17 の提案－」の中には、人間性豊かな日本人を育成するために、奉仕活動を全員が行うようにするというような内容が位置付けられております。

この提案を踏まえ、文部科学省では、平成 13 年 1 月に「21 世紀教育新生プラン～レインボープラン～<7つの重点戦略>」というものを提出しております。このプランに位置付けられた<7つの重点戦略>の 1 つに、「多様な奉仕活動・体験活動で豊かな日本人を育む」という戦略が掲げられており、奉仕活動の推進の重要性が改めて述べられております。人間性豊かな日本人を育成するためには、他者への献身や奉仕、思いやりの心を育てることができる奉仕活動を全員が行うようにする必要がありますということです。このプランを受けまして、平成 14 年には、「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策について」、中央教育審議会から答申が出されております。

平成 18 年には、教育基本法が改正されました。奉仕活動や体験活動を推進していく社会的機運の醸成や仕組みづくりの整備など、奉仕活動などの奨励や支援の大切さが明言されるとともに、教育

基本法の第3条におきましては、生涯学習の理念が新設され、「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない」と明記されております。また、この基本法の改正によって、第7条で大学に関する条項も初めてこの中に盛りこまれたところがございます。

また、安倍内閣のもと設置されました教育再生会議におきましても、ボランティア活動の重要性について議論されており、高等学校における奉仕活動の推進、大学の9月入学の促進、ボランティア活動体験を大学教育へ導入していくことなどについて、最終報告においてもまとめられております。最近では、平成20年2月に出されました中央教育審議会の答申、「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について」の中でも、国民が学習成果を生かす場としてボランティア活動の重要性、大学等の高等教育機関が地域の人材育成や地域貢献の機能強化など、地域との連携を図っていくことの重要性について提言されております。

さらに先ほど述べました平成18年12月に改正されました教育基本法の第17条の1項において、教育改革を実効性のあるものとしたしまして、目指すべき姿や具体的な教育振興の道筋を明らかにすることの重要性から策定を求められております「教育振興基本計画」が、本年（20年）7月に発表されました。ここでは、学校、家庭、地域が連携・協力し、社会全体で教育力を向上させるために、学校支援のボランティア活動を推進し、地域ぐるみで学校を支援するという「学校支援地域本部事業」について記載されているところでございます。

本日は、学生のためのボランティアの集いでございますので、今までお話をしていた経緯の中で述べました平成14年の「青少年奉仕活動・体験活動の推進方策について」という中央教育審議会の答申で述べられております、大学生に対するボランティア活動の奨励や支援について、もう少し触れさせていただきたいと思っております。同答申の第3項におきまして、「18歳以降の個人が行う奉仕活動の奨励・支援」について書かれております。大学等によるボランティア活動の奨励・支援として、大学における教育活動の中に、ボランティア活動関係団体との連携によるボランティア講座や、実際の活動に参加して学ぶサービスラーニング科目、あるいはNPOに関する科目等の開設が望ましいとされております。

また、インターンシップを含めまして、学生の自主的な活動について、教育効果などを勘案しつつ、単位として認定していくことが求められていると書かれております。そのほかにも学生の自主

的な活動に対する奨励・支援策といたしまして、大学そのものが、最大のボランティア活動の場となり得るよう環境整備に努めることや、学生に対する支援体制の充実として、学生への情報提供、相談窓口としてボランティアセンターの開設などの支援体制を充実させること、 Semester制度やボランティア休学制度、9月入学の促進、あるいはギャップイヤーなど学生が長期的な活動を行いやすい環境を整備することの必要性を挙げています。

続きまして、私どもで取り組んでおります取組について、お話をさせていただきます。まず、学校教育における取組について、学習指導要領の記載を中心に説明いたします。

本年（20年）3月28日に、小中学校の新しい学習指導要領を公示させていただいております。この新学習指導要領では、総則におきまして、ボランティア活動などは、児童・生徒の内面に根ざした道徳性の育成のために必要であるとしています。高等学校においても望ましい勤労観、職業観の育成や社会奉仕の精神の涵養に資するためにも必要なこととして位置付けています。

具体的な実施に関しましては、総合的な学習の時間を使い、積極的に取り組むこととしております。特に高等学校においては、平成10年度より「ボランティア活動に係る学修の単位認定」というものが進められております。平成17年度現在、全国の504校、1割弱の高校におきましてボランティア活動を学修の中に取り入れて、単位認定を行っていただいているところです。

このような高等学校における奉仕活動の単位化は、教育基本法や学校教育法の改定の趣旨を踏まえて行われているもので、全国で様々な取組が行われているところです。例えば、東京都においては、平成19年度からすべての都立高校282校において、「奉仕」という科目を新たに設け、必修として位置付けて体験活動を実施しているところです。また、山形県では、地域ごとに「やまがたヤングボランティア」という学校の枠を超えた中高校生のボランティアサークルが存在しております。そのサークルを基盤とした高校生のボランティア活動というものが進められているところです。

高等学校でのボランティア活動の単位認定は、今後も広がっていくことが予想されますが、全国的にみると、高等学校と受入れ先との連携や評価の問題など、まだまだ多くの課題があると思います。高校生の受入れやその受入れ先の調整役として、ボランティア活動センターの役割が重要になっておりまして、私ども文部科学省といたしましても、全国に置かれている、この支援センターの機能を強化していくためにも、資料の最後に記載しておりますが、「ボランティア活動推進センターの在り方に関する特別調査研究」というものを実施しているところです。

続きまして、「社会教育施設におけるボランティア活動に関する取組」について、お話をさせてい

ただきたいと思います。まず、社会教育施設におけるボランティア活動の実施状況です。図書館、博物館、公民館等におけるボランティアの登録者数は、平成17年度現在で、全国に58万人余りになっており、年々増加しております。特に図書館へのボランティア登録が多く6割を超えております。社会教育の拠点となる施設のボランティア活動を今後も更に進めていく必要があると感じております。

次に、私ども生涯学習政策局社会教育課において、今年度より実施しております2つの事業について、お話をさせていただきます。1つ目が、ボランティア活動への参加の場として大変力を入れて取り組んでおります「学校支援地域本部事業」、2つ目が、ボランティア活動をやりたい人とやってほしい人たちをマッチングしていくためにも重要な役割を担っております「活動支援センターの在り方に関する調査研究事業」でございます。

まず、「学校支援地域本部事業」についてお話をさせていただきます。この学校支援地域本部は、学校を支援するために、学校が必要とする活動について、地域の方々にボランティアとして活動していただくための体制をつくっていかうとするものです。言わば、地域につくられた学校の応援団といえます。地域のボランティアが、学校運営や教育活動を支援する取組については、これまで多くのところで行われてきたところですが、この事業は、その取組を更に発展させて、組織的なものとして、学校の求めと地域の力をマッチングすることにより、効果的な学校支援を行おうというものです。

まず、地域の方々に集まりいただく地域教育協議会を設置していただきます。これは、学校の校長先生はもちろんですが、PTAの役員の方々、それから自治会の方、地元の商工会の方々など学校を取り巻く団体の代表者の方々に加わっていただき、この本部をどう動かしていくのかの企画や評価についてお考えいただくというものです。この協議会のもとに地域コーディネーターという方を置きます。この方が、いわゆる学校とボランティアの間を調整する役目を担っていただきます。

私どものイメージでは、退職された先生やPTAの役員のOB等、いわゆる学校の内容が分かって、地域の顔が分かるという方がふさわしいかなと考えておりましたが、実際に本部が動き出してその状況を見ますと、様々な職業であるとか経験をお持ちの方に、このコーディネーターになっていただいているところです。学校支援ボランティアについては、これは地域の方々に、学校のために、子どものために何かやってみようという志のある方であれば、どなたでもご参加できます。そ

の方々にできることをやっていたらこうというものですので、特に資格を要するわけではありません。

平成 20 年度予算におきましては、全国に 1,800 カ所の学校支援地域本部をつくっていただくという計画で進めてまいりました。この 1,800 という数字は、市町村合併後の全国の市町村数です。少なくとも 1 市町村に 1 カ所以上は、設置していただきたいという願いをもった数字でございます。10 月現在での実施状況としては、既に 1,783 カ所の本部を立ち上げていただいているところです。我々が目標としている 1,800 を超える勢いでがんばって取り組んでいただいております。

平成 21 年度におきましては、これまでの倍である 3,600 カ所の設置を目指して、概算要求をさせていただいているところです。概算要求もちょうど詰めの時期で、12 月 20 日が財務省原案の内示の予定ですが、最後の財務省との折衝を日々行っているところでございます。ご覧いただいております一覧のように全国 47 都道府県で既に実施していただいております。それぞれの学校がある都道府県の実施状況をぜひご確認いただきたいと思います。

次に、この事業の核となります、「地域の学校支援ボランティア活動」について、具体的にご説明いたします。学校支援ボランティア活動は、具体的に、ここに示しております 4 つの分野に類似した活動が行われております。1 つ目としては、授業中や朝や放課後の活動など、子どもたちの学習が効率よく進められるように先生の指導を手助けする、「学習アシスタント」です。その活動には、ドリル学習の採点であるとか、学習準備の指導補助、家庭科の実習補助などがあります。

2 つ目は、学習の理解を深めるために、直接学習指導を行う「ゲストティーチャー」としての活動です。これは、地域の歴史や自然観察、華道や茶道などの芸能文化活動など、専門的な知識や技能を生かした活動が行われております。3 つ目として、子どもたちの安全や学習環境を整備する環境サポーターとしての活動で、登下校の安全パトロールや図書館や理科室等の特別教室の整備、あるいは花壇の整備などが行われているところです。4 つ目としては、学校施設の維持管理を支援する「施設のメンテナー」としての活動です。飼育小屋の修理や校庭の樹木の剪定などが行われています。

これらの学校支援ボランティアには、大学生の積極的な参加も見られるようになっております。いま画面に出ております資料は、東京都の小平市の小平第六小学校において行われている「学校支援地域本部」事業のデータです。この小学校では、学校と地域の大学との連携が行われておりまして、教科学習や総合的な学習の時間の指導補助として、1 年で延べ 2,578 名の大学生が、9,415 時

間にも及びボランティア活動に参加していただいております。

これらの活動が、子どもたちにとって役立っているのはもちろんですが、大学生にとっても長期にわたり継続的に小学生とかかわっていくことのできる大変貴重な機会だと思います。特に教員を目指される学生の皆さんにとって、教育実習の短い期間で自分が本当に先生に向いているかどうかというのは、なかなか判断しづらいところですので、一年を通してボランティア活動をやっていたくことによって、子どもたちと接することの楽しさというものを味わっていただきたいと思っております。

次に、ここに挙げました現場からの声にもありますように、この学校支援ボランティア活動は、子どもたちにとっても、現場の教師にとっても、そしてボランティアにとっても大変有意義な事業となっております。学校、家庭、地域が一体となり、地域ぐるみで子どもを育てる体制づくりを目的としたこの事業は、地域のいろいろな人が、学校の教育活動にかかわっていただくことで、子どもたちの教育をよりよいものにしていこうというものです。また、学校支援ボランティア活動を通して、地域住民にとって、生涯学習社会というものを実現していき、そして、地域の活性化や学校を核とした地域づくりにもつながり、地域の教育力というものも向上するのではないかと思います。

ぜひ、大学関係者の皆様方もこの事業に関心を持っていただき、大学がおかれている地域の学校との連携を積極的に図っていただきたいと思っております。都道府県の教育委員会の生涯学習社会教育の担当課にお問い合わせいただきましたら、実施している市町村、学校というものが分かりますので、ぜひご連絡いただきたいと思っております。また、学生の皆さん方が、このボランティア活動に参加しやすい環境、例えば単位認定ということもあろうかと思っておりますので、ぜひその辺もご検討いただきたいと思っております。

次に、「地域ボランティア活動支援センターの在り方に関する特別調査研究」ですが、先ほど高校生の奉仕活動の単位認定のところで触れさせていただきましたので、詳しい説明は省かせていただきます。本事業で対象の1つとしておりますボランティア活動支援センターは、平成20年度現在、都道府県に69センター、市町村においても812センター設置されております。設置率は、約半数の44.8%で、コーディネーターの設置状況や専任者の少なさなどの課題を抱えているのが実情でございます。

ただ、ボランティア活動を推進するにあたっては、ボランティア活動関係団体との連携を図ることや、ボランティア活動をやりたい人とやってほしい人とのマッチングなどその役割は、ますます

重要になってきております。各大学におかれましても、大学内に設置されておりますボランティアセンターには、地域のボランティア活動支援センターとの連携を図りながら、更に大学におけるボランティア活動の推進を図っていただきたいと思っております。

最後にボランティア活動を取り巻く動向を、更に大学にしぼり、お話をさせていただきます。まず、始めにボランティアを取り巻く背景の部分でも説明いたしました平成14年の「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」という中央教育審議会の答申の中で述べられております大学におけるボランティア活動の科目やその支援体制についてです。

まず、ボランティア活動を取り入れた授業科目数の開設状況については、上のグラフのボランティア活動を入れた授業科目を設置している大学数をご覧ください。お手元の資料では、平成17年度分の資料が更新されておられませんので、画面でご確認いただきたいと思っております。平成17年度は、国立大学49、公立大学16と若干減少（前年度：国立大学52、公立大学18）しておりますが、それに対し、私立大学においては210大学（前：私立大学185）で、全体では275大学に増加しているところでございます。

また、下の段の講義科目を開設している大学数については、平成17年度は、国立大学37、公立大学15、私立大学においては217大学で、全体では269大学と大幅に増加（前年度：全体193）しております。

次に、大学における支援体制を見てみますと、大学内外のボランティア活動に関する相談窓口を設置している大学は、平成16年度の調査によりますと、80%以上に達しており、確実に増加していると言えます。ところが、その業務を専門スタッフにより専門的な業務として実施しているところは、わずか2%に過ぎず、そのほとんどが、他の業務との兼務という形で支援活動を行っていただいております。

このような大学の状況の中で、学生のボランティア活動の参加率も確実に伸びてきております。平成17年度の調査によりますと、ボランティア活動を現在行っている学生と、これまでにボランティア活動を経験したことのある学生を合わせますと、65.2%になり過半数を超えております。また、活動分野別に見ますと、子どもたちやお年寄りなどに対するボランティア活動が増加していることに加えまして、「いきいきとした地域を作る」といった地域のかかわりに関するボランティア活動が増加しており、地域の「学び」の拠点として大学の将来が見えてくるように思います。

以上のように、大学で学んでいただいていることを実社会で生かして、「学び」を更に深めていく

ことのできるボランティア活動の重要性について、大学の理解が深まり、それに応えていこうという体制が、徐々にできてきているのではないか。また、学生の皆様方にとっては、社会とのかかわりの中で、学習してきたことを実践することで、それまでの「学び」を確認するとともに、自分の進むべき道をもう一度考え直す良い機会になっているのではないかと思います。

以上、私ども『文部科学省におけるボランティア活動の推進について』、駆け足で説明させていただきました。大学におけるボランティア活動は、まさにこれからが、推進と発展の時期を迎えているものと考えております。私どもの方針・取組にもぜひご理解をいただき、ボランティア活動の推進にご尽力をいただきますようお願い申し上げます。

それでは、これで私の説明を終わらせていただきます。ご清聴、どうもありがとうございました。

2. パネルディスカッション

大学におけるボランティアコーディネーションの課題と展望 ～教育の新しい動向とコーディネーターの役割～

司 会：興 梶 寛（昭和女子大学人間社会学部特任教授・コミュニティサービス
ラーニングセンター長／日本ボランティア学習協会代表理事）
パネリスト：李 永 淑（明治学院大学ボランティアセンターコーディネーター）
武田 直樹（筑波学院大学OCP推進室社会力コーディネーター）
松瀬 房子（立命館大学ボランティアセンター主事）

司会挨拶

ただいま文部科学省の出口さんから大変説得力のあるデータを駆使したお話をいただきましたので、もう進行役の私が付け加えるようなことはないのですが、若干このパネルディスカッションのテーマの主旨についてご説明をし、そして3人の方々にお話をいただこうと思っております。



「ボランティア活動のもつ潜在的な教育力」というものを活用して、それを大学教育の中でどう進めていこうかというのが、この集いの大きな主旨でございます。

「ボランティア活動の潜在的な教育力」というものを私なりに考えてみますと、1つは、学生が自分自身を探求していく一自己への探求、それが1つの大きな役割だと思います。今、私自身も大学で学生と接しておりますと、大学に入学して、これから先、自分自身が生きていくことに対する不安、自分の将来の生活設計をしていく上でも様々な不安があります。何のために自分は生まれてきて、何のために生きていて、なぜ生きなければいけないのか、それを見つけ出すことにも大変な苦勞をしている学生もおります。ボランティアを通して、自分が必要とされる存在として社会の中で役に立つのだ、大きな役割をこれから無限の可能性をもって果たすことができるのだということを知ってもらうということも大きなボランティア活動のもつ役割だと思います。

2つ目に、ボランティア活動は、社会を探求するという側面があると思います。現在、新しい教育基本法の中にも、「公」とか「個」というものの見直しというものをもっとやるべきではないかと

このような提案もされております。ややもすると成果主義に走る生活の中で、自分自身が他の人と一緒に暮らしていく、もっと大きな目から見ますと、グローバルな社会の中で自分自身が大きな役割を果たしていくということ、そのシチズンシップ (citizenship)、そういったものが問われているという側面もあります。学生たちが、身近な地域社会やグローバルな社会の課題に触れることによって、自分自身がその問題を解決していく主役であるという自覚と責任意識を育んでいく。そして、市民社会がどのように発達していけばいいのかということについても、その担い手として考えていく機会は重要だと思っております。

最後に、学びを探究するという3つ目の側面です。先ほどお話しがありましたが、ボランティア活動というものを通して学んだ知識や技術というものを自分のものだけにして人生を送るのではなく、それを共に生きる社会のために提供する。新しい中教審の答申の中に、知の循環型社会というような問題提起があります。また、日ごろ学んでいる大学のアカデミズムや技術と、ボランティア活動のもっている教育的な要素を結びつけて課題解決・問題解決的に学んでいくサービスマーケティングというものの重要性も、今、言われております。

このようなかたちで自分自身を自己探究する、社会を探究する、そして学びを探究するという3つの側面が、ボランティア活動のもつ潜在的な教育力の中にあるのではないかと考えております。しかし、こういった教育を進めていくためには、大学または地域社会の中で、それを結び進めていくコーディネーションというものが重要な役割を担っていきます。大学の学内でも、そうした学びを進めていくためのコーディネーションの仕組みをどう作るか。また、特に重要なことですが、そこで専任として業務にあたる専門のスタッフを大学の中でどのように確保して業務をすすめ、学生と教師と地域社会を結んでいくのか、そういった専門性というものの役割が重要だと考えております。

今年は、実際に大学の中でコーディネーションに当たっているスタッフの方にパネリストをお願いしまして、それぞれの実践の具体的内容、またどのような展望を描いているのかということについてお話をいただきます。そして私たちが共に大学の中で、また、地域と結んで、どうかたちでこうした活動を進めていけばいいのかということを考えてみたいと思っております。それでは、3人の方々に20分ずつお話をいただきたいと思っております。

それでは、明治学院大学の李さんからお話をいただきたいと思っております。それでは、李さん、よろしくお願いたします。

パネリスト（１）

「本学におけるボランティアセンターの役割と展望について —教育プログラムと3者協働プロジェクトの両輪を軸とした取り組みから—」

明治学院大学 ボランティアセンター
コーディネーター 李 永 淑



1. はじめに

明治学院大学ボランティアセンターは、1995年の阪神淡路大震災時に、学生が自発的に被災地に向かったことがきっかけとなり、大学内の独立した組織として全国に先駆けて誕生しました。まず1998年に横浜キャンパスに「横浜ボランティアセンター」が開設され、2001年には白金キャンパスにも「白金ボランティアセンター」が設置されました。現在では、ボランティアコーディネーター、専任教職員、学生スタッフが活動しています。

2. Do for Others という伝統

本学の創設者 J・C・ヘボン は、幕末の日本で無償の医療活動「ヘボン塾」での教育活動、聖書翻訳、和英辞典の編纂など、キリスト教精神に基づいたさまざまな活動を行ったことで知られています。「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなた方も人にしなさい (Do for others what you want them to do for you)」という「マタイ伝」の言葉は、本学の教育理念として受け継がれてきました。当センターは、このヘボンの考えを受け継ぎ、実践する部署として運営されています。

3. センターの現状と今後の展望について

当センターでは、設立当初から学生に対する「支援」と「助言」を行うという相談業務を基本とした、地道な学生支援を大切にしてきました。そして2003年に文部科学省の「特色ある大学教育プログラム」に選定されたのち、学生支援の幅を広げてきました。そのような中で、業務内容や量、スタッフの数や学生スタッフの数も増えていき、大学、地域、学生の特色と現状、ニーズ、そしてボランティアセンターのキャパシティを鑑みた上で、総合的に全体を見直す必要が生まれ、2006年度から、業務内容の整理と見直しを行ってきました※。そしてセンター設立から10年目を迎えた今

年度、長期的な視点から、今後のセンターのあり方について議論と見直しが始まりました。また学生と地域にとって本当に価値のある、そして大学の特性に合ったセンター創りを目指した、新たな取り組みも始まりました※。今回のテーマであるコーディネーターの役割と教育現場としての新たな動向と課題の検討は、当センターにおいても最重要課題です。本発表では今年度の取り組みの中で見えてきたコーディネーターの役割について考察を試みました（※業務内容詳細は <http://voluntee.meijigakuin.ac.jp/index.html> をご参照ください）。

パネリスト(2)

「つくば市をキャンパスにした社会力育成教育」の取組み

筑波学院大学 O C P 推進室
社会力コーディネーター 武田 直樹



1. 発言の趣旨

筑波学院大学は、平成 17 年度に東京家政学院筑波女子大学を改組・改編し、新たに男女共学として再スタートした大学である。

本学は、『社会力』の豊かな人間を育てることを教育目標の 1 つとして掲げ、市民と協働で作り上げる新しい姿の大学を目指して、日々邁進しているところである。ここで言う「社会力の豊かな人間」とは、様々な人たちと良い関係を作りながら、様々な実践活動を通して、自分から進んで「社会の一員」としての、「市民」としての義務と責任を当たり前のこととして果たすことを喜びにし、生き甲斐に、社会の運営に参加することのできる人間のことである。

そのために、平成 17 年度から「つくば市をキャンパス」にするという構想「オフ・キャンパス・プログラム (Off Campus Program)」(以下、O C P と略す) を通して、1 年生から 3 年生までの学生全員が必修科目として 3 年間に亘り、一人の市民として様々な社会活動に参加することで、社会の仕組みを実感できると共に、幅広い人間関係を築くことができると考え、全学を挙げて実践に取り組んでいる。

この O C P は、実践を開始してわずか 2 年目の平成 18 年度、文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム (現代 G P) / 地域活性化への貢献」に採択され、同省の助成金を得ながら、プログラムを実践している。

ここでは、本学の行う O C P を通した社会力育成教育の意義や概要、そのための仕組み作り、実践事例、学生アンケート結果などを紹介することで、少しでも他大学の参考になれば幸いである。

2. 講演内容の要約

(1) O C P 実施の仕組み

O C P を実施するにあたっては、(図 1) のように学内のみならず学外との関係においても様々な仕組みづくりを行った。

【学内】

■ O C P推進室の設置

O C Pを全学的な取組みとして、迅速な決断の下プログラム運営していくためにO C P推進室を設置した。O C P推進室は、O C P推進室長を学部長が兼任し、学科長、学生支援課長を含む8名の教職員に、社会力コーディネーター3名を加えたメンバーで構成されている。

また、学生の視点からO C Pのプログラム運営に意見を反映させるためにO C P学生スタッフを編成し、現在約20名の学生スタッフが活動に取り組んでいる。

■ 社会力コーディネーターの採用

学生一人一人の興味や関心に応じた社会参加活動を行うことのできるよう支援し、最適な受け入れ団体との橋渡し役を担う「社会力コーディネーター」を業務委託契約で採用（現在3名）し、実践科目を履修する数百人の学生と約100に及ぶ受け入れ協力団体との間を調整する役割を担う。更に、数十人の担当教職員との学内調整を行う。

社会力コーディネーターの役割は、大きく以下のようにまとめられる。

- ① O C Pのオリエンテーションの実施。また、実践科目に関わる一連の書類手続きを行う。
- ② 随時学生の相談に応じ、学生の興味・関心を引き出し、それに合った受け入れ団体とのマッチングを行う。
- ③ 学生の活動モニタリングを行い、アドバイスやフォローアップ、受け入れ団体との調整を行う。また、活動中間時と活動終了時にふりかえりを行い、学生の学びを深める。
- ④ 学生の活動状況をクラス担任・担当教職員に報告し、学内の学生支援体制を強化する。
- ⑤ 学生の活動を学内外へ広く情報発信するための広報・宣伝活動を行う。
- ⑥ O C P学生スタッフに情報提供やアドバイスを行い、活動を支援する。
- ⑦ O C Pに関する地域の窓口となる。
- ⑧ 教育プログラムとしてのO C Pをより良いものにするために、改善に向け提言する。

■ O C P学生スタッフの編成

学生の主体的な参加がO C Pには不可欠である。そのため、O C Pに対して学生の視点からプログラム運営に意見を反映させるために、平成18年10月からO C P学生スタッフを編成し、現在約20名の学生スタッフが活動に取り組んでいる。

学生スタッフは、OCPのより良い推進のために欠かせない存在となっており、以下の3つのチームで構成されている。

- ① 企画・運営チーム：プロジェクトの企画立案や運営を行う
- ② コーディネートチーム：地域と学生の橋渡しを行う
- ③ 広報チーム：OCPに関する学生の活躍を学内外へ広く情報発信する

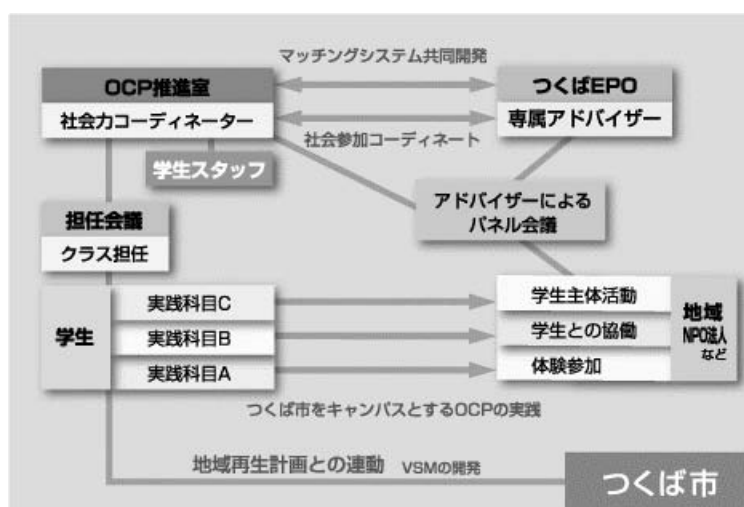
【学外】

■ つくば市との連携協定の締結

学生がつくば市をキャンパスに社会参加活動を行う上で、つくば市の理解と協力なしには、円滑なOCP運営はままならない。そのため、平成17年5月に本学とつくば市は「筑波学院大学とつくば市との連携に関する協定」を締結し、OCPの活動を行うにあたり協力を得られ、つくば市の各部署の活動にも学生が参加できる体制を整えた。

■ NPO法人つくば市民活動推進機構（つくばEPO）との連携協定の締結

学生の受け入れ協力団体探しや、市民活動団体で学生が社会参加活動を行うにあたって、大学の持つ繋がりや、ノウハウだけでは、学生のニーズに十分に答えきれない。そのため、市民活動に関する外部アドバイザーとして、つくば市を中心とした市民活動団体を中間支援する目的で設立された「つくばEPO」と平成18年5月に連携協定を締結した。



(図1) OCP実施のシステム

(2) OCPにおける実践科目

現在、実践科目A、Bは担任教員担当科目、実践科目Cは担当教員担当科目の必修授業として実施しており、その枠組みを(表1)に示す。

(表1) 担任担当教員科目としての実践科目

科目群	科目名	履修年次	単位数	備考
実践科目	実践科目A (キャリア実現基礎講座、社会参加基礎実習)	1年次 (必修)	2単位	1. クラスごとに学外での活動を立案し、企画と運営を学生同士の話し合いと協働によって実行する。 2. 体験的に市民活動団体の活動に参加する。
	実践科目B (社会力強化実習)	2年次 (必修)	2単位	市民活動団体の活動に30時間以上中長期的に参加し、運営スタッフとして、まちづくりに貢献する活動を行う。
	実践科目C (市民実践活動)	3年次 (必修)	2単位	学生が、自分の問題意識や関心事にもとづいた市民活動を企画し、60時間以上の活動を実践する。

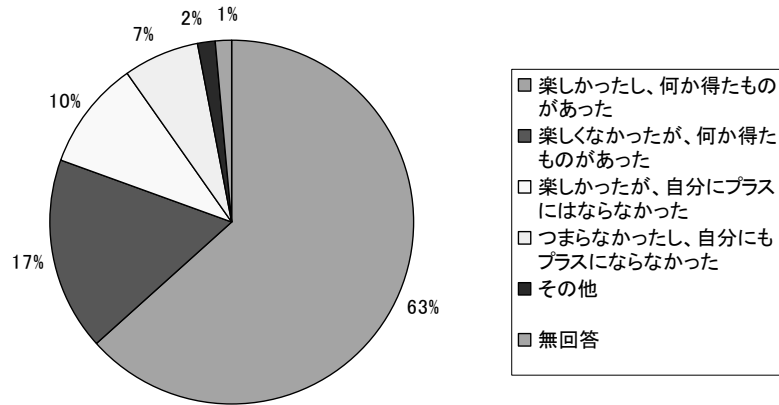
(3) 活動実績

学生は平成18年度(1年生:38団体、2年生:48団体)合計69団体(延べ87団体)で活動し、平成19年度(1年生:22団体、2年生:48団体、3年生:15団体)合計61団体(延べ85団体)で活動を行った。

中には、複数の団体で活動を行う学生、そのまま継続して活動に関わり続けている学生、卒業論文にまで繋がっている学生もいる。

(4) 学生アンケート結果

平成19年度に行われた学生スタッフによる学生アンケートでは、全学年の約80%の回答者が「得るものがあった」と好意的な評価をしており、「プラスにならなかった」と否定的な評価をした回答者は20%弱であった(図2)。さらに、平成18年度に比べ、好意的な評価が10%上昇している。



(図2) 実践科目の感想 (全学年)

(5) 受け入れ団体アンケート結果

(表2) 受け入れ団体からの評価 (平成19年度)

		受入団体数	無回答
I	今回の筑波学院大学生の社会化活動参加者は貴団体に役立ったと思いますか？	49 (51)	4.5 (4.1)
II	今回の筑波学院大学生の社会活動参加者は学生の社会力向上に役立ったと思いますか？	49 (51)	4.4 (4.1)
III	今回受け入れた学生の活動状況はどうでしたか？	49 (51)	4.4 (3.9)

*) () 内は平成18年度

3. 課題提起

(1) 社会力育成のために：3年間に亘る社会参加活動の必修化

社会力は市民として誰もが必要とされる力であるため、必修とすることで学生全員に社会と関わるきっかけ(動機付け)を図ることが必要である。また、単発型の社会参加活動ではなく、長期に亘るステップアップ型の社会参加活動が効果的。

(2) 地域に根差した学校のあり方

全ての学生が地域の一員として様々な社会参加活動に取り組むことで、市民との繋がりが飛躍的に増し、一方で、学生の教育に市民にも関わってもらうことで学校と地域とが相互に開かれた関係となる。

⇒学校と地域を繋ぐコーディネーターの重要性を如何に理解してもらうか？

パネリスト（3）

「大学におけるボランティアコーディネーションの課題と展望 ～教育の新しい動向とコーディネーターの役割～」

立命館大学 ボランティアセンター
主事 松瀬 房子



1. 立命館大学ボランティアセンターについて

（1）立命館大学について

立命館大学は、京都市北区と滋賀県草津市の2つのキャンパスに12学部を置いており、学生数3万人を超える総合大学である。2003年の全学協議会（全学の総意を形成する会議）において、確かな学力と豊かな個性を育む教育システム作りを今後の教学上の重要な課題としたうえで、ボランティア活動が豊かな個性を育む上で重要な役割を担うものとして位置づけられた。つまり、ボランティア活動を「学生の『学びと成長』を促す活動」ととらえ、大学としてボランティア教育を推進している。

（2）立命館大学ボランティアセンターについて

立命館大学ボランティアセンターは、2004年4月に衣笠キャンパス、2006年にびわこ・くさつキャンパス（以下、BKC）に設置された。ボランティア活動を教学的な観点から推進するセンターとして設置された経緯もあったことから、今年度の組織改変により、学内ではサービ斯拉ーニングセンターという名称に変更された（対外的にはボランティアセンターという名称を継続して使用している）。

2. 立命館大学におけるボランティア教育の体系化

（1）現代GP採択事業「地域活性化ボランティア教育の深化と発展」

体系的なボランティア教育システム構築のための取り組みが2005年度の現代GPに採択され、今年度で最終年度を迎えた。この現代GPの取り組みは、導入・応用・発展という3つの段階それぞれに正課授業と課外自主活動を支援する体制をおくことにより、ボランティア教育を推進するものである。

1) 第1段階「地域ボランティア活動参加への動機づけ」

まずは導入段階である。ボランティア活動に対する興味・関心が薄い学生や、ボランティア活動参加への一歩をなかなか踏み出せない学生を対象にした取り組みを行うのが第1段階の事業である。正課授業としては、より多くの学生にボランティアを考える機会を提供するため講義型の科目を開講している。課外の取り組みとしては、センター窓口でのコーディネーションを行ったり、ガイダンス・体験プログラムなどのイベントを実施したりしている。

ここでのコーディネーターの役割は、センター窓口でのマッチングやボランティア活動に関わる情報（一般的注意事項やボランティア保険のことなど）の提供などを行うことである。また、イベント型のプログラムにおいては、センターに相談に来る前の段階にある無関心層をも巻き込むことができるような企画を学生スタッフと共に立案したり、地域のボランティア関係団体とのネットワークを構築したりすることが求められる。

2) 第2段階「地域社会の一員としての自覚と能力の育成と専門知識の応用的理解」

次に応用段階である。「ボランティアを学ぶ」授業である「ボランティアコーディネーター養成プログラム」と、「ボランティアで学ぶ」授業である「地域活性化ボランティア」という2つの授業を核とした事業を展開している。

とりわけ「地域活性化ボランティア」では、さまざまな動機で受講する学生の学びと成長をサポートするため、教員とコーディネーターが連携をはかりながらプログラム開発～運営までを手がけている。コーディネーターは、教員と共同でプログラム開発を行い、プログラムの実施期間中は、受講生・地域の受け入れ団体担当者・教員の間をつなぐ役目を果たしている。具体的には、事務局としての事務的な業務、新規プログラムの開拓、各プログラムの巡回、リスクマネジメントなどを行っている。教学的に必要な部分は主に教員が担い、その他は主にコーディネーターが担うという形で分担する体制をとっている。

3) 第3段階「情報発信能力の向上」

そして最後が発展段階であり、学生の自主的な情報発信による学生ボランティア活動の啓発・促進を行うために「学生コーディネーター制度」を設置している。一般的にはボランティアセンター事業に関わる学生を「学生スタッフ」と呼ぶが、本センターでは「ボランティアコーディネーターである」という意識付けを行うために「学生コーディネーター」という名称を用いている。学生コーディネーターは、主に導入段階の学生に向けた取り組みを企画・実施することにより、学生ボラ

ンティア活動の促進に取り組んでいる。

学生コーディネーターの育成に関わるコーディネーターの役割は、スーパービジョンと学びのし
かけづくりである。実務的な相談から心理的な支援まで、活動の中で感じた疑問や悩みに対するス
ーパーバイズを日常的に行っている。また、学生の自主性に任せるだけではなく、P D C Aサイク
ルを徹底するような働きかけや、研修会の実施、必要に応じて振り返りを行うなど、学生の主体性
や意欲を尊重しつつも、学びや成長という視点から必要な取り組みを織り交ぜるようにしている。

（２）立命館大学におけるボランティア教育の体系化

以上のように、本センターは、導入・応用・発展という3つの段階ごとに正課授業・課外活動の
双方を支援する事業体制をとることにより、体系的なボランティア教育を推進する体制を整えてき
た。導入段階のプログラムに参加した学生が、地域でのボランティア活動に取り組むことによって、
地域課題への興味・関心を持つようになる。そのような学生たちが、「地域活性化」をキーワードに
地域課題の解決に取り組むサービスラーニングのプログラムを受講したり、地域ボランティア活動
のリーダー的存在を目指すボランティアコーディネーター養成プログラムを受講したりする。最終
的には、それら一連の経験を活かして、自ら地域社会の問題を発見・解決するために取り組んだり、
学生のボランティア活動活性化へ向けて導入段階にある学生に対して働きかけを行ったりする。こ
れにより、各段階を経る中で学びを深め、人間的な成長をはかるだけではなく、それらの学びが循
環していくシステムの構築を目指している。

3. 大学におけるボランティアコーディネーションの課題と展望

（１）立命館大学ボランティアセンターの役割

大学ボランティアセンターでは、①地域に対してどのように貢献できるか、②ボランティア活動
をどのように学びにつなげることができるか、③学生がボランティア活動から学び・成長している
か、という3つの視点を意識しておく必要がある。そして、この3つの視点を常に考慮に入れなが
らコーディネーションを行うことが求められるのが、大学ボランティアセンターのコーディネータ
ーではないだろうか。教員でもなく、地域でボランティアを求める当事者でもないからこそ、この
3つの視点のバランスを考えながら、それぞれと調整をはかる役割を發揮できるのではないかと考
えられる。

日常的に地域のボランティア関係団体や中間支援組織とのネットワークを構築しながら、地域社

会が抱える課題と大学資源との接点を見つけ、それと同時に、その課題に取り組んだ学生たちはいかに学びと成長を得られるかという視点からボランティア活動の啓発・促進やプログラム化に向けて動くことが、大学ボランティアセンターの役割であり、大学ボランティアセンターで働くコーディネーターに求められる役割ではないかと考えている。

(2) 大学におけるボランティアコーディネーションの課題と展望

最初のセンター設置から5年目を迎え、正課から課外までさまざまな事業を整備するという点については一定達成できた部分もあったが、まだ課題も抱えている。

大学ボランティアセンターとして重要な「学生の学び」「地域への貢献」の達成度を、何を目標にどう検証するかという評価軸の設定はまだ試行錯誤の段階にある。導入から発展までの各段階のつながりや学びの循環に向けた取り組みもこれから力を入れる必要がある。

正課のプログラムとしては、より幅広い分野の活動ができるような連携先の開拓や、プログラム間の相互連携、継続的・発展的なプログラムの実施、各学部の教員との連携など、質的にも量的にも広がりを持たせることが課題である。そのためには、より幅広い学内外のネットワークが必要である。学生の専門知識を地域社会に還元することにより、地域側には地域課題の解決というメリットがもたらされ、学生側には学びの深まりと人間的成長というメリットがもたらされるサービスマーケティングを推進するという点からも、地域課題と大学資源とをつなぐ機能を持つことも必要だろう。さらに、これらの経験を蓄積することによって、さまざまな授業で取り入れることが可能なサービスマーケティングの手法を提案できるような機能をセンターに備えることも可能ではないだろうか。

課外活動の支援には、支援プログラムの豊富化という課題がある。そこで、ボランティアセンターを単なるボランティア情報の提供や企画を行う場にとどめるのではなく、ボランティア活動に参加する学生同士の集いの場としての機能を備えるため、「ぼらカフェ」という取り組みを試験的に実施している。「ボランティア系サークル合同ガイダンス」という企画を通じて知り合ったボランティア系サークルの代表者たちが、日頃の活動で感じる疑問や悩みなどを気軽に話せる場として始まり、現在はサークルのメンバーだけではなく、学生コーディネーターやボランティアに興味のある学生などが定期的集まっている。ボランティアを通じて学生がつながり、各々の活動を発展させるための場としてのセンターという可能性も追求していきたいと考えている。

質疑応答

司会（興梠 以下同）：すばらしい発表をいただきまして、ありがとうございます。3人の方々の発表を終わりました。それでは、質疑応答に入ります。3人のパネリストの方、よろしくお願いします。実は、かなりの数の質問が寄せられ、短時間では全部にお答えできませんので、大変申し訳ありませんが、その中から幾つか選んで質問をさせていただきます。もし、それでもという方がおられましたら、休憩時間や分科会で、お話をいろいろ聞いてくださるよう、お願いしたいと思います。



司会：最初に、全員の方にお話を聞きたいということで、それぞれ簡単に質問に答えていただけると有り難いのですが、ボランティアセンターの運営体制についての質問です。1つは、「センターの運営方針は、どのような組織をつくり、意思決定をしているのでしょうか」という質問です。若干、先ほども触れられておりましたが、センターの運営方針は、学内のどのような組織で意思決定をしているのかということです。2つ目が、「センターの運営の予算・財源は、どの程度、どのように確保しているのか」という予算・財源の話です。この2つについて、李さんからお願いします。

李：先ほどのスライドが非常に早かったので、見落とされたかと思うのですが、まず意思決定の部分ですが、本学のボランティアセンターでは、委員会を2つ持っておりまして、1つが運営委員会、もうひとつが推進委員会です。運営委員会の委員長は学長であり、各学部や部署から代表で委員が選出されておりまして、その委員会において、業務の内容などの議題をあげ、決定ということになっています。推進委員会はボランティアセンター長の諮問機関として位置づけられておりまして、委員長はボランティアセンター長が務め、委員には学部学科から選出された教員のほか、学生スタッフや校舎近隣地域の方々も参加しております。

あとは、予算ですが、本学の場合は、学内の部署として位置付けができておりますので、他部署と同じようなかたちで予算申請をしております。

武田：筑波学院大学の場合は、先ほどのプレゼンでも、意思決定の部分に関してご説明させていただいたかと思うのですが、OCP推進室という全学的な組織をつくり、学部長が推進室長となり、

学科長が入り、あと学生支援課長が入り、そういった主要な教職員の方と、社会力コーディネーターが入った中で、意思決定をしていくということです。その後、教授会の承認を得るというかたちになっています。

予算のほうですが、現代GPが採れたということで、現代GP予算のほうで、私のコーディネーターの人件費も含め、それに係わる費用は、ほぼそちらのほうから出してもらっています。あとは、今後もということを見据えて、大学予算のほうも、ある程度は確保をしているという状況の中で進めています。

松瀬：立命館大学のセンターでは、サービ斯拉ーニングセンター会議というものを置いておまして、ボランティア関係に詳しい教員がセンター長として1名、副センター長として2名おります。そのほか、ボランティアセンターが、教学部の共通教育課というところに置かれておりますので、教学部の副部長や次長、共通教育課の職員などがメンバーとなっており、教員と職員とで意思決定を図っております。

予算の財源や規模ですが、本学も、今年度までは、現代GPの予算がついておりますので、メインはそちらになります。大学からも一部予算をつけておりますが、今はほとんど現代GPの予算で動いているという感じです。

司会：ありがとうございます。このお答えでも足りない場合は、あとでまた質問してください。

司会：それでは、幾つか共通した質問があるのですが、基本的なことについて、何人かの方が質問を寄せています。ボランティア活動に対して実際に単位認定をしていくということについての考え方です。例えば、ボランティア活動を単位認定したり、必修化しているという時点で、それはもうボランティアではないのではないかと。いわゆるボランティアと単位認定に関する考え方の違い、ちょっと難しい質問かもしれませんが、これについて、今度は松瀬さんからお願いします。

松瀬：本学でも確かに単位認定型のプログラムがいくつかありますが、私たちとしては、ボランティアをしたことに対して単位を与えているのではなく、ボランティア活動を通じて学んだこと、それをレポートとしてまとめ、自分の言葉で発表することができて、はじめて単位が与えられると考えておりますので、ボランティア活動への単位ではなく、学びに対する単位というスタンスをとっております。

また、必修化されたら、ボランティアにならないんじゃないかという話なのですが、立命館大学

ボランティアセンターの科目は、すべて選択科目で置いていますので、必修科目は、1科目もありません。ですので、学生が自発的に自分からそのプログラムを取らないと、ボランティア活動で単位が付与されるということがないというような仕組みをとっております。

武田：筑波学院大学の場合、3年間必修化ということで、そうですね、今の社会の流れだとかを考えたときに、はたして、選択でやりたい学生やモチベーションの高い学生だけを対象にしているのかというようなところもあります。それは逆に、先ほどの発表で見ていただいたように、実際にやる中で、モチベーションが上がった学生を学生スタッフとして自発的な参加に結びつけるというようなこともありますので、やはり全員が、まずは社会参加を行うということを目指しています。先ほど、私も言いましたが、言葉のあやではなく、ボランティアという言葉をも使っていないのです。つまり、必修なのでボランティアではないと思っています。しかし、社会参加というものも、やはりあるきっかけや枠組みがないと、外に飛び出せないというふうに思っています。そのためにも、やはり必修化をすべきだろうということ。あとは、やはり大学の目標においてどういう人間を育てたいのかということにもかかわってきまして、やはりそういう社会力のある学生を、全員育てたいという思いの中で、必修化をしております。ですので、授業を通したきっかけづくりとして、まずは、社会に入っていくということです。

李：明治学院大学の場合ですが、先ほど発表でありましたように、センターのほうで主催をしている教育プログラムというものが2つございました。資料のほうにも書いてあると思うのですが、こちらのほうは、単位認定はされておられません。しかし、サービスラーニングのスタイルを参考に取入れて、事前学習、海外での現地体験と学習、そして帰国後の報告書・報告会など含めまして、内容としては、学生が悲鳴を上げるぐらいの大変なボリュームで、半年かけてやっております。

そういうところで、発表では、本学の場合こちらの位置付けを最後の検討課題というところを出させていただきましたが、現在議論をしている途上でございます。こういう現状があるのですが、現場の考え方としては、大学というのは教育機関であり、学生を育成する場所であるかと思えます。あとは、やはり高等教育機関ということもあるので、先ほどもスライドで少し出したのですが、理論と実践、この2つがワンセメスターで終わってしまう授業とは違ったかたちで、教育サービスを提供し、その後の協働パートナーとして学生と一緒に4年間ずっと付き合いができるというような育成プログラムの実践といったような、ボランティアセンターならではのかわり方があるのではないかと考えております。いきなり、ボランティアとかそういうところに行きなさいと言って、学

生ができるわけではないので、やはりある程度の基礎体力、社会の中、地域の中で、学生がぐり抜けていける基礎体力を養成する責任というのもセンターにはあるかと思います。

先ほどおふたりのパネラーの方もおっしゃっていましたが、ボランティアをすることに対して単位を与えとか評価をするという考えではなく、あくまでも機会提供で、その中で学生が学び、体力をつけて、その後どう活動していくか、どう社会の中で羽ばたいていくか。そちらのほうが大事なかなと思っておりますので、あくまでも教育プログラムというのは育成の機会提供の1つであると考えております。

司会：ありがとうございました。

司会：今度は、松瀬さんと李さんの両方に聞いてほしいというご質問があります。これも大事なことです。大学によっては、ボランティアセンターなどの窓口が、障害学生のための窓口を兼ねている場合と、学生支援室と分けているような場合があります。そこでおふたりに聞きたいのですが、1つは障害学生支援についてですが、立命館大学では、ボランティアセンターと障害学生支援室がどのような連携、あるいは協働関係で行われているかということ。それから学生スタッフのかかわりとは、全く別のことなのでしょうか。このかかわりを聞きたいと。

それから李さんのほうには、「明学では、ボランティアセンターの活動の中に、ノートテイク関連が含まれているとのことですが、多くの活動がある中で、どのように位置付けられているのでしょうか。また、学生スタッフのかかわり方はいかがですか」。ちょっと似ていると思いますけど、それでは、松瀬さんのほうからお願いします。

松瀬：本学のボランティアセンターでは、障害学生支援室も併設されていて、障害学生支援室のコーディネーターとボランティアセンターのコーディネーターが、同じオフィスに机を並べています。ですので、日常的なレベルでの情報共有というのは、常にやっているのではないかと思います。

また、学生スタッフとのかかわり方ということですが、本学のセンターでは、障害学生支援室の学生スタッフは、ノートテイクをするなど、障害のある学生の支援というのをメインにやっておりますので、どうしても専門的なスキルがいる部分というのが大きくて、ボランティアセンターのコーディネーターとしては十分に関わることができていません。けれども、簡単に話を聞いた上で、専門的な部分になったら障害学生支援室の専門のスタッフにつなぐとかたちで関わっております。

司会：ありがとうございます。李さんのほうは、いかがでしょう。

李：本学の場合は、ボランティアセンターの業務の中に、ノートテイクボランティアのコーディネーターと養成というものが入っております。先ほどの発表で、組織図の中に非常勤ボランティアコーディネーターという記載があったかと思うのですが、本学の場合、ノートテイクのコーディネーターとノートテイクボランティアの養成講座、そういったものを企画するためのスタッフとして、非常勤ではあるのですが、ノートテイク専門のコーディネーターを1人置いております。

体制としては、そのスタッフを中心に、在籍している聴覚障害の学生が両キャンパスにいるとか、今学期は横浜キャンパスにしかいないとか、今学期は白金キャンパスにしかいないとか、結構いろいろ状況が変わる中で、非常にコーディネーターが難しいのですが、ほかのスタッフといろいろ協力をしながらやっております。

やり方としては、ノートテイクは、ある程度専門的な技能というか要約筆記でありますので、聴覚障害学生に対する理解や要約筆記をするにあたって必要なスキルの講座の開催が必要になります。それを開催し、そこで登録をしてもらおうということで、今、70人ぐらい登録があったと思います。ただ、登録をしても、先ほど申し上げたように、聴覚障害の学生がどこの校地にいるとか、それからノートテイクボランティアをやる学生自体の時間割のバランスなどもあるので、やりたいからできるというわけでもなかなかなくて、非常に難しいところではあります。

登録人数がいても、なかなか前期、後期にきちんとはめていくのが、コーディネーターする中で一番難しい問題であると思います。ということで、非常勤コーディネーターのスタッフを置いていますが、ほかにも地域の方々にも協力をしていただきながら、聴覚障害学生の支援をやっているのが現状です。そういう中で、やはり学内の理解と協力というのにも必要になってきています。そういったところで、ボランティアセンターの中で、現状等をどんどん発信していくのが、大きな課題であると思っています。

学生スタッフのかかわりなのですが、学生スタッフにこのノートテイクボランティアをやりなさいと指導することは、特にございませぬ。ただ、学生スタッフもほかの学生と同じようにノートテイクボランティアの講習会に参加をして、テイカーとして登録をして、ノートテイクボランティア活動に一生懸命かかわっている学生もたくさんおります。

司会：ありがとうございました。

司会：それでは、個々にご質問があるものを幾つか取り上げたいと思います。まず、筑波学院大学の武田さんに質問ですが、科目の評価についてです。成績評価は、どなたがどのような基準で行っているのでしょうか。複数の教員がいる場合には、成績評価の平等性をどのように保つのかという質問です。

武田：評価に関しましては、まだ学内で明確な基準がないというのが現実です。担任の先生が単位を出す役割を持っているので、学生が実際に活動に行ってきた、そのときの様子などの情報を、こちら側から担任の先生に伝えます。またレポートは、我々コーディネーター側と担任の先生側、両方に回ります。あとは事前のオリエンテーション、中間時と事後のリフレクション、それらの参加状況なども含めて、総合的に担任の先生に評価をしてもらいます。担任制を執っていますので、確かに評価をする何人もの先生がいます。その中で平等性がとれているかということ、必ずしもとれているとは言えない。その先生の判断によるところが大きいというのが現実で、それは今後、考えていかなければいけないところだと思っています。

司会：ありがとうございます。

司会：また、教科に関連する質問が松瀬さんのほうにもあります。「ボランティア教育関連科目は、選択科目だと思いますが、全学生のうちどのぐらいの割合で受講していますか。また、単位を取得した学生が、その後、単位に関係なくボランティアを継続している場合も多いと思いますが、どのぐらいの割合で継続していますでしょうか」というご質問ですが、お願いします。

松瀬：そうですね…あまりにも総数が多いものですから、私たちが割合までは全部は把握し切れていないと思うのですが、先ほどの発表で中心に紹介した地域活性化ボランティアという授業ですと、大体例年100～150名ぐらいが受講していますし、第1段階に置いている講義型の科目は、それぞれ100～200名ぐらい毎年受講しています。そのほかにも、ボランティアのリーダーを養成するためのプログラムで、大体40～50名ぐらい、例年それぐらいの学生が受講しています。

それぞれインターンシップであるとか体験のボランティア活動に行った先で、その活動が面白くて、楽しくて、そのままつながってしまったというような学生の話も時々は聞いたりするのですが、実際問題としては、今のところ多くはないというのが現実です。

司会：ありがとうございます。第1段階では、コーディネーターがかかわっていくようなお話がさっきあったのですが、第2、第3段階のときに、どのようなかかわり方をするのでしょうかという

質問がきています。

松瀬：学生に対してとか、プログラムについてでしょうか？

司会：コーディネーターが、第2段階、第3段階ということに対して、どうかかわり方をしているのでしょうかという質問です。

松瀬：そちらのほうは、スライドを見ていただいたら分かりやすいと思うのですが、当日配布資料43ページの最後のスライド、「第2段階におけるコーディネーターの役割」ということでまとめているのですが、事務局としての業務以外にも連携先やプログラムの開拓・開発もやっていますし、そのほかにもプログラム実施期間中にサポートを行ったりもしています。そして、第3段階でのコーディネーターのかかわりにつきましては、44ページの一番上の右側のほうのスライドが「第3段階におけるコーディネーターの役割」です。主には、学生コーディネーターに対するスーパービジョンや学びのためのしかけづくりといった部分にコーディネーターが関わっております。

司会：はい。わかりました。

司会：それでは、李さんに「コーディネーションを行う上で、学生スタッフから学ぶことはありますか。また、学生スタッフならではの視点というのは何かあげることができますでしょうか」というご質問です。

李：学生スタッフの視点ですか？

司会：おそらく学生スタッフならではの、発見できることとか、発想できることとか、そういう意味ではないかと思います。コーディネーターとは違う学生ならではの視点や考え方でしょう。

李：はい、わかりました。一番はじめのご質問ですが、学生スタッフから学ぶことは当然あります。発表の時間が短くて残念だったなと思うのですが、先ほどスライドで紹介した、今一緒にフル稼働でやっている学生スタッフ、私は、彼らのことを仲間だと考えております。先ほど「がむしゃらであること」とか、「謙虚であること」ということを示したと思うのですが、なぜあのようなことを書いたかと言いますと、彼らは私どもにとって、協働パートナーだからです。学生は4年間しか時間がなく、特に強制力もない関係性の中で、こういうふうに集まってくれて、プロジェクトなりを立ち上げて、一緒に汗をかいてくれているわけです。私もそうですが、学生も真剣なわけですから、真剣さの中で、そういったものを短期間であそこまで打ち出そうとすると、やはり信頼関係がないと、お互いの率直な議論というものができませんので、そういったところで、非常に率直にお互い

がぶつかり合っているのではないかと考えております。

そういう中で、私が彼らに対して一番頭が下がるなと思うのは、大体こういうふうにかかわっている学生というのは、1つだけ何かやっているという人はいないのです。「僕忙しいからできません」という言葉が先に出ることは絶対なくて、限られた中でどこまでできるかというのを真剣に考えられる人たちなのです。学業も一生懸命やっていますし、学生スタッフの活動以外も個人的にインターンシップに参加したり、ボランティアに出かけたり、もちろんアルバイトなんかもやっておりますし、通学に2時間近くかけて通っている学生もおります。そういった中で、自己管理を彼らなりに一生懸命やり、かかわっているその「がむしゃらさ」と「謙虚さ」が、彼らの一番尊敬すべきところだと思いますし、誇りに思っています。

学生スタッフならではの発見というのは、同じような答えになるかとは思いますが、そういう中で、学生にしかできないことがあると思うのです。例えば、先ほどのおふたりのご発表にもあったかと思うのですが、一番できることというのは、ピアエデュケーションと言いますか、私みたいになちょっと年取ったおばさんがしゃべるよりは、自分よりもちょっと年が上、1～2年ぐらい先輩といった人たちが、ちょっと遠そうに見えるのだけれども、でもこんなにやっているということが、非常に分かりやすく、また目標にしやすいのです。そういった人たちを学生同士交わせることによって、飛躍的に伸びることがものすごくあります。ちょっと逸れたかもしれないのですが、これだけが発見だとか、これだけが学ぶことだというのは言い切れないぐらい本当にたくさんあります。

司会：ありがとうございました。

司会：それでは、時間が来ましたが、最後に全員の方にお訊きするのにいい質問だと思います。「大学と地域をつなぐコーディネーターに求められるべき価値観、スキル、知識、持つべき経験について教えてください」ということなのですが、それぞれのコーディネーターに対するこうあったらいいなという考え方、それをお伺いして終わりたいと思います。それでは、松瀬さんから順番にお願いしたいのですが、その前に、李さん、私も気になっていたのですが、今日の発表の最後に「希望を組織する」という言葉を言っていたのですが、希望を組織するというのは、いったいどういうイメージで捉えればいいのか。どんなことをおっしゃりたかったのか、これも含めて最後にお願ひします。では、松瀬さんからまずお願ひします。

松瀬：非常に難しい質問だと思います。まずうちのスタッフは、社会学系やボランティア系の学部で学んだ経験があるということが、基本的な採用の条件ではあるのですが、そういう小難しいことではないと思っています。それはやはり、地域の人が何を求めているんだろうとか、学生が何を求めているんだろうという「人に対するまなざし」がどこまで持てるのかというところが、コーディネーターの本当に基本的な資質なのではないかと思います。問題を抱えていたり、何か課題を抱えている人に対して向ける目線、それがしっかりと、「この人はどうやったら、良い顔になるんやろうな」ということを考えられる視点というのがないと、どれだけスキルがあっても、知識があっても、それは結局空振りになってしまうのかなとは思っています。漠然とし過ぎていますが、本当に人を見るということ。そして、その個々人の集まりである地域や学生たちというのをしっかりと見て、そのこのメリットや利益というものを考え、行動できるというのが、基本的な資質ではないかと思っています。

司会：ありがとうございます。それでは、武田さん、お願いします。

武田：そうですね…漠然とした質問ですのでお答えするのが難しいですが、やはり学生が好きだというのは、まず、第一だと思うのです。やはり学生が好きで、その学生が、地域の中で学ぶ。そのサポートをいくらでもしたいという、そういう思いというのは、まず、第一優先かなと思います。もちろん、地域の中で、どういった方とタイアップするのが一番いいのかというような、嗅覚というか、五感というか、どういうリソースとつながるのかということも自分たちで判断していかななくてはいけない、そういうようなある意味、教育プログラムとして、受け入れをお願いできるかの判断ができるかどうかです。あとは、そういう人間関係をコーディネーター自身がつくれるかどうかという部分もあると思います。

私自身は、大学のコーディネーターというかたちもあるのですが、大学のコーディネーターは、コミュニティワーカーでもあるのではないかという気もしております。私自身も大学と離れたところでは、つくばは自分のふるさとでもあるものですから、いろいろな地域活動に、一市民としてかわったりということで、受け入れ団体の方は、仲間でもあったりするんです。ですので、やはり同じ土俵の中で一緒に考えられる。地域をよくしていきたい。子どもたちと一緒に育んでいきたいということを、大学から離れたところでも一緒に常に話ができる。そういう仲間がいるというのが、すごく大事だなと思っています。あとは、やはりコーディネーターですので、いろんな経験を積んでいるということは大きいと思います。

司会：ありがとうございました。

それでは、李さん、希望を組織化するということを含めてお願いします。

李：まずコーディネーターの資質みたいなところですか？

司会：そうですね。価値観、スキル、知識、経験、どんなことが求められているかということを知りたいということです。

李：はい。まずは、これは基本中の基本だと思うのですが、やはり現場を知っている人。もしくは現場経験がある人、これは必須だと思います。言葉にしてしまうと、非常に軽い感じにはなってしまい、ありきたりですが、ネットワーキング力とか、コミュニケーション力、そして私がすごく大事だと思っているのが、イマジネーション力です。想像する力を持っていることがとても大事なと思います。また、クリエイティブな力、創り出すことがすごく好きな方などがいいのではないかと思います。また、先ほどの武田さんのご発言ともかぶるかと思うのですが、学生が好き、そういったこともあると思います。

どんな現場であっても、どんな状況であっても、やはり楽しめる人がとても向いているのではないかと思います。ということで、日々学生と共有しているのですが、大事にしたい成長の3ポイントとして、まず素直であること。そして、勉強が好きであること。「なんでもいいので、学ぶ意欲とか向上心があることが大事だよ」ということは言っています。そして最後に、ポジティブ・前向きであること。この3つを大事にしていれば、成長というのが伴ってくるのではないかと、常々、学生と共有していることです。

最後に、興梠先生から、ご指摘をいただきましてありがとうございます。希望を組織すると書いたのですが、私の今日の発表で十分お伝えできない部分もありましたが、特に今年度、半年ぐらいの短い期間で、あれだけ打ち上げてやった中で、大変なこともたくさんありました。これらひとつひとつ、学生や地域の方々や、その他かかわってくれた学内のいろんな部署や教員など、本当にいろいろな人たちと交わらせていただいたのですが、1つやっぱり共通点はなんだったかなと思うと、皆さん、希望を持っていらっしゃったからかかわっていただいたかなと思うのです。希望というのは、あらゆる個性を表すことでもあるかと思います。個性というのは、年齢もそうですし、性別やバックグラウンド、そして人生のいろいろなプロセスなどあると思うのですが、そういったそれぞれ皆さんが持っている個性や、これから望むこととしての希望は人それぞれ異なると思います。

でも、そこでもつながっていけるというのはすごいなと思います。地域や学生の方に、私は今、かかわらせていただき、その人たちと横のつながりをつくろうと努力しているのですが、その人たちのことを、私は希望というふうに表したかったのだと思います。皆さん大変な中でいろんな人生を歩んでいますけど、人生を歩むということは、やはり希望を持っていらっしゃるから、前に歩いていくことだと思いますし、その希望というのは、やはり夢であるし、可能性であるかなと思います。

私はボランティアセンターで、今、学生が非常にたくさん出入りをして楽しいのですが、夢を語るセンターでありたいなと思います。学生とそういった夢や希望を議論しあえる。それが叶うか叶わないか分かりませんが、そういった場が、非常に少なくなっています。本来、大学というのは、そういう場所であるのではないかと思っているのですが、そういった場にしたいと思います。それができるのが、大学のボランティアセンターではないかなと考えています。大学にいる主体というのは学生でありまして、学生は、社会を担っていく未来です。そういった人たちがたくさんいるからこそ、地域の方々の期待もあるし、厳しいいろいろなご意見もあると思うのです。そういった中で、さまざまな希望を組織していくことは、大きな社会の波やうねりを創っていき、みんなで何か大きなアクションを起こしていけるのではないかと思うのです。以上から、私の希望も含めて、「希望を組織する」という表現にさせていただきました。すいません。長くなりました。

司会：ありがとうございました。大変短い時間でお話をいただいたのですが、私自身、ものすごくたくさん勉強するものがありました。改めて、3人のパネリストの方々、ありがとうございました。それから会場の皆さんも参加いただきまして、ありがとうございました。

これから分科会です。またもっと深めていきたいと思います。それでは、どうもありがとうございました。失礼いたします。

第2部 分科会

**興梠 寛（昭和女子大学人間社会学部 特任教授・
コミュニティサービスラーニングセンター長
日本ボランティア学習協会 代表理事）**

全国の大学において、学生のボランティア活動を支援する取り組みへの関心が高まっているとはいえ、大学において学生のためのボランティア支援に取り組むためには、いまだ十分な環境が整っているとはいえ、教職員のあいだでも試行錯誤の状態が続いているのが現実である。

第1分科会は、そうした時代背景を確認しつつ、とくに直接学生への支援にあたる学生部職員等を対象に、大学における学生へのボランティア支援の在り方を解説し、さらには参会者同士の情報交換や問題意識の共有、課題解決的な研究協議を行うことを目的にして、講義とワークショップを行った。



1. 講義

（1）ボランティア活動の現状と課題

「私が変わる、社会は変わる」をテーマに、現代社会のボランティア活動の現状と課題について、世界の動きから日本の現状までを講義した。また、現代人のボランティア意識の特徴、教育改革におけるボランティア学習推進政策、市民社会におけるボランティア・NPOの社会力と推進の現状、企業の社会責任と社会貢献活動の現状、さらには大学生のためのボランティア支援の考え方について、幅広く解説した。

（2）大学における学生のボランティア支援の取り組み

大学はいまなぜ、学生のボランティア活動への支援を行うのかについて、つぎの3つの視点から講義を行った。

①自己への探究

学生自身が自己の生き方を見つめ発見し、探究していくためのボランティア活動支援の在り方。

②社会課題の理解

現代社会の諸問題を実践活動をとおして理解し、責任ある社会人としての自覚と責任意識を育むためのボランティア活動支援の在り方。

③研究成果の活用と社会還元

学生がアカデミズムと社会課題とを結びつけて、ボランティア活動をとおして課題解決的に学ぶ「サービスラーニング」などの支援の在り方。

さらには、大学における学生支援環境をどのように整備するのかについて、「ボランティアセンター」機能の基礎知識、担当職員によるボランティアコーディネーションの在り方について解説した。

2. ワークショップ（演習）

参加者同士が小グループに分かれて、大学の業務遂行におけるボランティア支援に関する問題意識の交換や共有、さらには、あらかじめ用意した討論テーマをもとにした話しあい、全体での意見発表などを行った。

討論した内容は、学生が地域社会におけるボランティア活動を行う際には、いかなる心構えについて助言すればいいのか、について討論したものである。

演習のテーマは「快適ボランティア活動術—マナートレーニング」であった。

藤田 久美（山口県立大学社会福祉学部 准教授）

<分科会の概要と参加者>

第2分科会の参加者は、36名で学生支援課などの職員が8割、大学教員が1割、ボランティアセンター職員が1割でした。

大学ボランティアセンターを設置する際の準備期間や実施状況についての事例発表と参加者同士で現在抱えている課題や状況などの情報交換を行いました。

また「大学ボランティアセンターの設置・運営にあたって大切にしたいこと」をテーマにグループごとのカードワーク、KJ法を用いて整理し、各グループで発表・共有しました。



事例発表

国際医療福祉大学IUHWボランティアセンター長の太石剛氏より、3年前に設置されたボランティアセンターを設置・運営についての話題を提供していただきました。センターを設置・運営することで学生の活動が活性化し、センターの存在が学内外に定着していることが報告されました。センターを設置したことで様々な可能性の拡がりが見られるようにはなったが、より質の高いコーディネートの方法や授業との関連及び学生が主体的に活動できる仕掛け作りなどについての課題の整理と今後の展望についても報告がありました。

質疑応答の時間には、センターの設置を考えている大学職員から積極的な質問があり、分科会のテーマの共有化が図られ、参加者のモチベーションも高まる時間となりました。

グループワーク

グループワークでは6グループに別れ、自己紹介を兼ねて「各校におけるボランティア活動支援の現状と課題」についてグループで共有しました。その後、「大学ボランティアセンターの設置・運営にあたって大切にしたいこと」をテーマにカードワーク、KJ法を用いて、模造紙に整理し全グループで発表しました。グループでまとめられたものを全部紹介します。

A班「コーディネートが大事よ」

ボランティアセンター全体	・ボランティア活動の具体例の提示・正確に、より多くの情報を伝える
地域・社会との関わり	・他大学・サークルとの連携・学生の活動を支援しながら、地域や社会の人と良い出会いがあるように、気を配る
大学全体	・部屋の確保・予算の明確化
コーディネーターの役割	・学生自身による、全学生へのPR活動・学生が気軽に入れる雰囲気作り ・学生スタッフの業務の内容の明確化
学生同士の関わり	・ボランティアに対する考えの共有 ・学生自身が、自分で企画し動けるようにそのきっかけを提供する
センター全体	・ボランティア活動の具体例の提示・正確に、より多くの情報を伝える
地域・社会との関わり	・他大学・サークルとの連携・学生の活動を支援しながら、地域や社会の人と良い出会いがあるように、気を配る
大学全体	・部屋の確保・予算の明確化
コーディネーターの役割	・学生自身による、全学生へのPR活動 ・学生が気軽に入れる雰囲気作り ・学生スタッフの業務の内容の明確化
学生同士の関わり	・ボランティアに対する考えの共有 ・学生自身が、自分で企画し動けるようにそのきっかけを提供する

B班「バランスが大事よ！」

学生の思い	・学生の自主性を尊重する・教員の理解・協力 ・学生のニーズにこたえる
外部との関係	・ボランティア先でのトラブル・地域との連携
リスク	・いきすぎる学生を止める・安全 ・リスクをどうヘッジするか
方針	・ボランティアセンターの意義の明確化 ・ボランティアセンターの運営方針
人・モノ・金	・財源の確保・ボランティアセンターの部屋 ・専門のコーディネーター
その他	・学内のボランティアに関する業務を整理・情報共有 ・気軽に立ち寄れる

C班「ボランティアセンター開設の3本柱！」

部屋	・ボランティアセンター事務室の確保・入りやすいセンターの装飾 ・学生が相談しやすい場所
人	・専門スタッフ・教職員の理解・やわらかい頭とあたたかいハート
金	・予算
地域連携も必須！！	・地域連携パイプの確保・外部へ向けた正確なアナウンス ・他大学とのふれあい
でもやっぱり組織もね！	・組織図と規定・危機管理・連絡、経路の整備・開設のタイミング
中心は学生	・学生のやる気を引き出す・学生とのコミュニケーション ・様々な学生と関わる根気・愛情

D班「学生の学びを大切にするプラットフォーム作り」

古い考えを捨てる	・古い考えを捨てる
予算	・最低限の予算
組織作り	・学長（執行部）の理解・各部署の連携と理解 ・ボランティア支援体制の強化
学生の学びを大切に	・学生同士の学び合い・自主性・学生の希望にどう対応していくか？
場所	・場所
人材	・学生スタッフの育成・人材
学生の活動時間の確保	・学生の活動時間の確保
知識	・知識
地域とのつながり、資源	・地域住民の協力・地域との連携、つながり

E班「学生中心のボランティアセンター」

学生中心	・学生の意思の尊重・学生の主体性を大切にする ・モチベーション・学生が得たものの社会への発信
お金	・もっと予算を・自由に使える予算・財源
組織	・組織の確立・規定・ボランティアセンターの運営をもっと効率よく！
施設	・部屋・施設
人	・スタッフ・コーディネーター
コミュニケーション	・地域の特性を考慮する・教育を第一の目的にする ・ボランティアの必要性・新入生へのアピール
楽しさ	・楽しく・やりがい感・参加しやすさ
安全	・安全性の確保・安全にボランティアに参加させられる為の危機管理

F班「ボランティアセンターの永続に必要なこと」

場所（部屋、Web等）	・スペースの確保・学生が行きやすい明るい部屋 ・情報の安全性・システム
コマーシャル	・告知（学生）・学内広報・教職員の理解
学生の学び合い	・継続性・育ちを見守るシステム・インセンティブ（単位・お金） ・学生の満足度の向上
学生の出会い	・ボランティアを必要とする学生・学生スタッフ ・障害者学生に対応できる体制
安全	・ボランティア学生の安全の確保・ボランティアの依頼を受けるときに、 団体情報や内容について見極めることが必要
自治体・地域	・地域、自治体等の連携・行政との関わり・他大学との関わり
社会的評価	・メリット・外部への告知
お金	・予算
組織	・運営委員会
スタッフ	・専任スタッフ・常駐スタッフ・相談しやすいコーディネーター
最終目標	・学生の成長

所感

大石氏の事例発表を受けて、参加者のモチベーションも高まり、大学ボランティアセンターの設置・運営における課題の共有やセンター運営で大切にしたいことを全員で共有することができました。大学の規模や学生や地域の実態及びセンター設置の準備状況など、それぞれの大学で抱えている課題や状況など、意見交換・情報交換する時間も充実されていたようです。

カードを用いたグループワークでは、参加者同士が協力しあいながら、「大学ボランティアセンターの設置・運営にあたって大切なこと」をひとつの模造紙に描きだすことができました。この作業過程の中で、学生と地域の実態及び大学の規模や予算など、センターの設置・運用にあたって検討すべき課題が整理されたのではないかと思います。また、日常的に学生支援にかかわるお立場で「学生を大切にす」という視点のもと、学生の実態や学びのニーズに対応することやリスクマネジメントについても話題にあがりました。

全グループの発表時間では、参加者全員でうなづきながら共有されている場面が印象的でした。大石氏からも「＜センター設置＞にあたっての大切なキーワードが整理された」とコメントをいただきました。

最後に、模造紙を貼り、それを閲覧しながら参加者同士の交流タイムを設けました。模造紙を写真に撮る人、意見交換をされている人、名刺交換をしながら情報交換をする人などが見受けられ、分科会の時間を通して参加者同士の交流がより深まったことが感じられる時間でした。

松瀬 房子（立命館大学ボランティアセンター 主事）

第3分科会では、日ごろボランティアセンターや大学の窓口において、ボランティアコーディネーション関わっている教職員・コーディネーター・学生スタッフが感じている課題や悩み、理想について話し合いました。そして、その現実と理想との間にあるギャップを埋めるためには、どういうことに取り組みばよいのか、参加者同士でさまざまなアイデアを出し合い、発表していただきました。



また、事例紹介として、筑波学院大学OCP推進室学生スタッフの馬場裕さんと花見さやかさん、藤田保健衛生大学の市原慶和先生から、ボランティア活動やその支援に関する現状についてお話いただきました。

グループワークの中で出された意見の一部をご紹介します。

《現状・課題・悩み》

- ・ 学生と地域をつなぐ役割や、集う場所がない
- ・ 活動が続かない
- ・ 地域が学生に期待しすぎる
- ・ 事務処理に長い時間がかかる
- ・ 大学側の理解不足や、予算的限界
- ・ 大学側のマンパワーが足りない
- ・ 大学・学生・地域の協働の必要性（意識の共有）
- ・ ボランティア情報が学生に届かない
- ・ 各大学の窓口が見えにくい
- ・ 受け入れ団体との関係の築き方

《理想》

- ・ 大学から頼りにされる地域のボランティアセンター
- ・ 地域のメンバーとして認められ、愛される大学になる
- ・ 異動のない専門職の専任スタッフ付きのボランティアセンター設立
- ・ 学生全員が気軽に入ってこられるボラセン、学生の居場所づくり
- ・ 量より質
- ・ 大学の教職員も積極的にボランティア活動を行う
- ・ 地域のニーズと学生の活動が一致していること

- ・ 学生と地域が日常的に交流する場があり、そこから自然発生的に助け合える関係作り
- ・ 多様なボランティアができるよう、周辺の大学とも連携する
- ・ 地域の人にも一緒に学校づくりに関与してもらおう（コミュニティスクールのように）

《現状を理想に近づけるためにできること》

- ・ 大学・学生・地域団体の定期的な会議の実施
- ・ 大学のトップの理解を促し、支援してもらおう
- ・ 身の回りからボランティアコーナーを始めて、場所を広げていく
- ・ まずは教職員がボランティアをする
- ・ 飲み会
- ・ 大学・学生・地域団体の定期的な会議開催
- ・ 人材のスキルアップ、自分を変える（勉強する）
- ・ 企業からの寄付金や助成金などをもらう
- ・ 過去の実績等を資料としてまとめて情報を発信する
- ・ 大学の特性を活かした学問を地域に還元した講座を開く
- ・ ニーズの把握（情報のプール）
- ・ 現在の学生の社会参加・自主活動の把握
- ・ ホームページを作成して情報を共有する
- ・ 専門の講師による導入教育を行う

この分科会にはベテランのボランティアコーディネーターから教員、学生、地域の組織の方まで多様な層の方々が参加して下さいました。そこで、グループワークを始める前に「あなたにとってボランティアとは？」というテーマで、自己紹介を兼ねたアイスブレイクを行いました。参加者から出された素敵な意見の一部をご紹介します。

	共育（共に育つ）
	笑顔
	志が集う場所
あなたにとってボランティアとは？	ライフワーク
	趣味が魅力に変わる場所
	明るい未来
	自分と社会がつながっていることを確認する窓
	やってみたらどっぷり、まさか仕事になるとは…
	などなど

栗田 充治（亜細亜大学国際関係学部 教授）

1. オリエンテーション

コーディネーターより本日の進行について説明し、資料の説明をした。その概要は以下の通りである。

ボランティア学習やサービスラーニングの実践例が高校や大学でかなり増えてきている。

授業内容に即したボランティア体験活動やフィールドワークを授業期間中に設定して、学んだ内容を現場で確かめ、現場体験をクラスに持ち帰り、交流や振り返りを行い、学習内容を肉付けするという教育方法をサービスラーニングと呼ぶが、午前の出口寿久氏の講演にあったように、福祉系や教育系はもとより、様々な分野に広がりつつある。

また、ボランティア活動を単位認定する形も普及してきている。

量的な広がりはずまらずのところまで来ているが、今日では、ボランティア学習の中身について、質的な水準を確保することが課題となっている。教育活動としての質の確保を追求して欲しい。

その後、事例発表に移った。



2. 事例発表

事例発表① 神戸大学 山本佳史氏「学生公認サークル Truss の活動」

留学生との交流・相互理解を目的とした学生公認サークル「Truss」の活動について発表された。

部室はなく、留学生センターの一室を借りてミーティングをしている。拠点確保が課題である。

活動としては、留学生の受け入れ（書類作りや口座開設の手伝い）、生活必需品を安く手に入れるキッチン計画、健康診断サポートなどの他、災害支援活動（海外、在日留学生）、交流イベント、他大学との連携、勉強会、合宿、などを行っている。

イラン留学生が交通事故で死亡した際、留学生に不利なドライバーの証言を覆すために、皆で目撃情報集めをして、ドライバーの過失を明らかにしたこともあった。

15年目を迎えて、留学生に関心が深まったり、メンバーの思いやり精神、社交性の成長などがみられる。今後、記録をきちんととるスタイルの確立、ノウハウを後輩にどう伝えるかという継続の課題、メンバーの間の温度差や考え方の違いをまとめて継続していく困難さ、を自覚している。

事例発表② 木更津工業高等専門学校 岡本 保氏「木更津工専におけるボランティアの取り組み」

「特別学修」という卒業要件 167 単位中 10 単位分の枠内で「福祉ボランティア」1 単位（平成 14 年度第 1 学年に開設。翌年全学年に開設）と「地域支援ボランティア」1 単位（平成 17 年度開設）を開設し、選択科目として単位認定をしている。

4月に希望者登録と保険加入をし、説明会を実施、木更津市社協に登録し、各団体からのボランティア依頼を受け付ける。担当教員の研究室前に掲示し、学生の希望を募る。希望者のあることを依頼団体に連絡し、学生を派遣する。終了後、活動報告書を提出させ、活動証明書とともに、年度末、教務委員会に単位認定を申請する。

活動は休日や長期休暇中が多く、老人ホーム、障害者施設、学童保育施設、公民館で活動している。活動内容は、清掃、交流、イベント補助、出前授業の支援、体験学習補助、地域活性化活動などである。

学校の教育活動評価や認証の際には地域貢献は必ず評価項目となり、その際はこういうことをやっていると書き込んで利用しているのに、まだ学校全体としての取り組みになっていないという課題がある。ボランティア活動に単位を出すということの教育的位置づけと理解がまだ進んでいないこともある。疑義を持つ教員は協力してくれない。1学年1,000名の所、ボランティア登録者は15年度48名、16年度46名、17年度102名、18年度111名、19年度64名、20年度76名である。このうち単位認定される学生は2割から3割である。卒業救済の手段となるケースもある。

担当者としては、将来のボランティアのきっかけとして機能すればいいのではないかと考えている。

事例発表③ 横浜市青少年交流センター 遠藤夢沙氏「大学生による高校生進路相談ボランティア体験活動について」

交流センターの活動として横浜国大と連携して「キャリアカフェ」を開設し、同大学の「高大連携」というサービスラーニング科目の実習活動軒会を提供している。

高校生に対しては、進路・進学についての意識を深め、視野を広げることを目的としている。

交流センターとしては、キャリア形成支援事業、高大連携支援事業として実施している。

横浜市青少年交流センターは青少年の居場所となるべく設置され、24歳までの若者が対象である。地域柄、繁華街が近く、お金を使うところばかりというイメージがある。来館者層は、私立や公立の高校生を中心として、近隣の小中学生や大学生、社会人である。

大学生に対しては、地域課題を実感する機会（インターンなど）を提供すること、生き方を再考する機会となること、「他者」にふれ自分を知る機会（ピア・エデュケーション）となること、活動を他者に伝える機会（掲示板など）を提供すること、を目的としている。

4日間のプログラムで、毎回メンバーは違い、大学生はのべ29名、高校生はのべ40名参加する。当日は振り返りシート、アンケートを用意し、学生は授業レポートの課題がある。

課題としては、高校生のその後のフォローができていないこと、「がんばって勉強した後」に対する疑問（大学卒業後の方向性）に答えられていないこと、「ふつうの高校生」がなかなか参加してくれないこと、である。

事例発表④ 山口大学 辻 多聞氏「『おもしろプロジェクト』と『学生自主活動ルーム』について」

当日、受付の資料コーナーに山口大学「おもしろプロジェクト」・「学生自主活動ルーム」のパンフレットが積んであったため、急遽、飛び入りの発表をお願いした。

「おもしろプロジェクト」は1996年より、広中平祐学長の発案とポケットマネーの提供により開始されたもので、学生の積極的で創造的な学園生活を促すために学生のおもしろい自主的活動に資金（10万～50万円）援助する制度である。平成2005年度文科省特色ある教育GPに選定された。2008年度は17件の応募があり、12件採用されている。

同大学では学生支援課のもとに「学生自主活動ルーム」を2006年オープンさせ、5名体制（兼任者2名含む）で管理・運営している。「ボランティア」とせずに「自主活動」という名称を選んだのは、福祉イメージに偏ることをさけたかったのと、ボランティア以外の活動を含む「おもしろプロジェクト」とのつながりを意識したためである。

3. グループワーク

3班（S, T, V）に分けて、模造紙と付箋を使用してQ&Aをまとめる作業を行い、結果をまとめてもらう。以下は各班のメンバーと発表者、及び発表の概要である。「・・・>」の先は、各班で出された回答例である。適宜、コーディネーターの見解を挿入してある。

4. 全体発表

V班（井出 信、岡本 保、阿部紀夫、高山直子）発表者：世田谷ボランティア協会 阿部紀夫氏

【カリキュラム作り】

- * 講義時間とボランティア活動時間はどれくらいが適切か？・・・> それぞれ15時間程度と発表会を組み合わせる。
- * オリエンテーションのやり方は？・・・> カリキュラムによる。地域のボランティアセンターのコーディネーターに依頼する手もある。
- * 必修科目にした場合の履修者数の適正規模と評価方法は？・・・> 担当者の考え方によるが、ワークショップなどを用いる場合には、50名を超えると、やりにくくなるし、学外での活動の指導や把握が粗くなる危険がある（栗田）。評価方法の中心は、いかなる場合でも、自己評価を有効に組み込むことである（栗田）。

【担当教員】

- * ボランティア科目の担当資格は？・・・> 科目名を適宜変更する。コーディネーションができる教員であれば担当は可能である。学内にいなければ外部講師に依頼する。
- * 教員の負担軽減策は？・・・> クラブ指導のようなものと割り切る。組織としてのコンセンサスがほしい。

T班（山本克彦、辻 多聞、八木佑太郎、遠藤夢沙、佐藤捷夫）発表者：山口大学 辻 多聞氏

- * ボランティア活動に熱心な学生の表彰制度はないか？・・・> 日本学生支援機構が毎年各大学からの推薦を募集している「優秀学生検頭彰」の分野の中に「社会貢献活動」という分野があるので、それに大学として推薦する（栗田）。
- * 苦手科目を上級生がサポートするチューター制度などはないか？・・・> アドバイザー制度のような例はある。大学院生をつけることが多い（栗田）。
- * ボランティア登録者を活動につなげるには？・・・> 活動報告会や先輩の体験談など、学生同士が刺激しあう機会を作る（栗田）。
- * 学生の動向の把握は？・・・> 動向把握の仕組みを作る。「いつ、どこに、誰が」の把握と報告プラス記録。
- * センターを居場所にする学生がいるのが気になるが？・・・> 専門スタッフが必要である。「居場所」がほしいのは基本的な欲求だから、心配いらない。「居場所」と思ってくれるのはむしろありがたいことである（栗田）。

- * 場所やお金の確保がむずかしいが？G P切れたらどうするか？・・・> トップダウンに頼る。他のファンドを当てる。ファンドレイジングを学生にする。
- * ボランティアをどこまでも進めるのではなく、アルバイトに切り替えた方が効率的では？・・・> 考え方による。求めるスキルによる。留学生など学生の活動には多少の援助が必要だ。有償・無償の線引きは現実には難しいが、学生は基本的には無償でいくべきだ（栗田）。

S 班（高原有香、西岡将美、糸井亮子、米良明信、吉田 滋）発表者：明治学院大学 糸井亮子氏

【ボランティア学習カリキュラム作りに必要なことは？】・・・> 以下は回答例。

- * 社会課題に気づく要素
- * 何ができるか考え、行動する領域
- * Plan～Do～See のプロセス
- * ボランティアを活動にする仕掛けと仕組みを学ぶ内容
- * 「情けは人のためならず」という言葉の意味
- * ボランティアとは何か、学生の言葉で考え、発表する場
- * 学生同士の交流
- * 参加したい人が参加できる制度（人数制限をしない）
- * フィードバック
- * 実際の活動（ボランティア体験活動）
- * ボランティアコーディネーターの講話
- * ボランティア団体による体験談
- * 先輩学生による体験談
- * 実習のためのボランティア団体との意見交換会
- * 学生報告会へのボランティア団体の参加

【考えたいこと】

- * 単位認定の条件・評価尺度？・・・> Plan～Do～See のサイクルを作る。体験活動を通して得たことのプレゼンテーション。Share 共有する機会。フィードバック。
- * ボランティア学習の適切な時間数は？・・・> 体験活動は 15 時間程度以上が望ましい。
- * LDやADHD学生の参加は（特に必修授業で）？・・・> 様々な背景を持つ方を受け入れる活動先は結構あるので、心配いらない。

【してはいけないと思うことは？】・・・> 以下回答例。

- * 学生がなぜそのボランティアをするのか分からないで、ただ活動させられること。
- * ボランティアをやって終わりというような内容の授業。
- * 一斉に多数の学生ボランティアを地域に丸投げすること。
- * 「あなたは***のボランティアをしているのだから***は当然」という態度。

【ボランティア学習の成果を就職に結びつける】・・・> この方向は強まるでしょう（栗田）。

- * ボランティアの第三者評価（採用時）を導入する。
- * ボランティア体験をエントリーシートに記入するよう指導する。

第5分科会

学生が結ぶボランティアネットワーク

小抜 隆（東北福祉大学ボランティアセンター コーディネーター）

第5分科会では、参加者の皆さんが日ごろ感じている疑問・課題の解決のヒント・糸口をみんなで探しあうこと、また、ネットワークづくりの場とすることを目的に、進行をさせていただきました。具体的には、自己紹介・個人ワーク・グループ討議・全体でのわちあいを行いました。

グループごとに話し合われたテーマ・課題及び寄せられた意見・提案などをご紹介します。

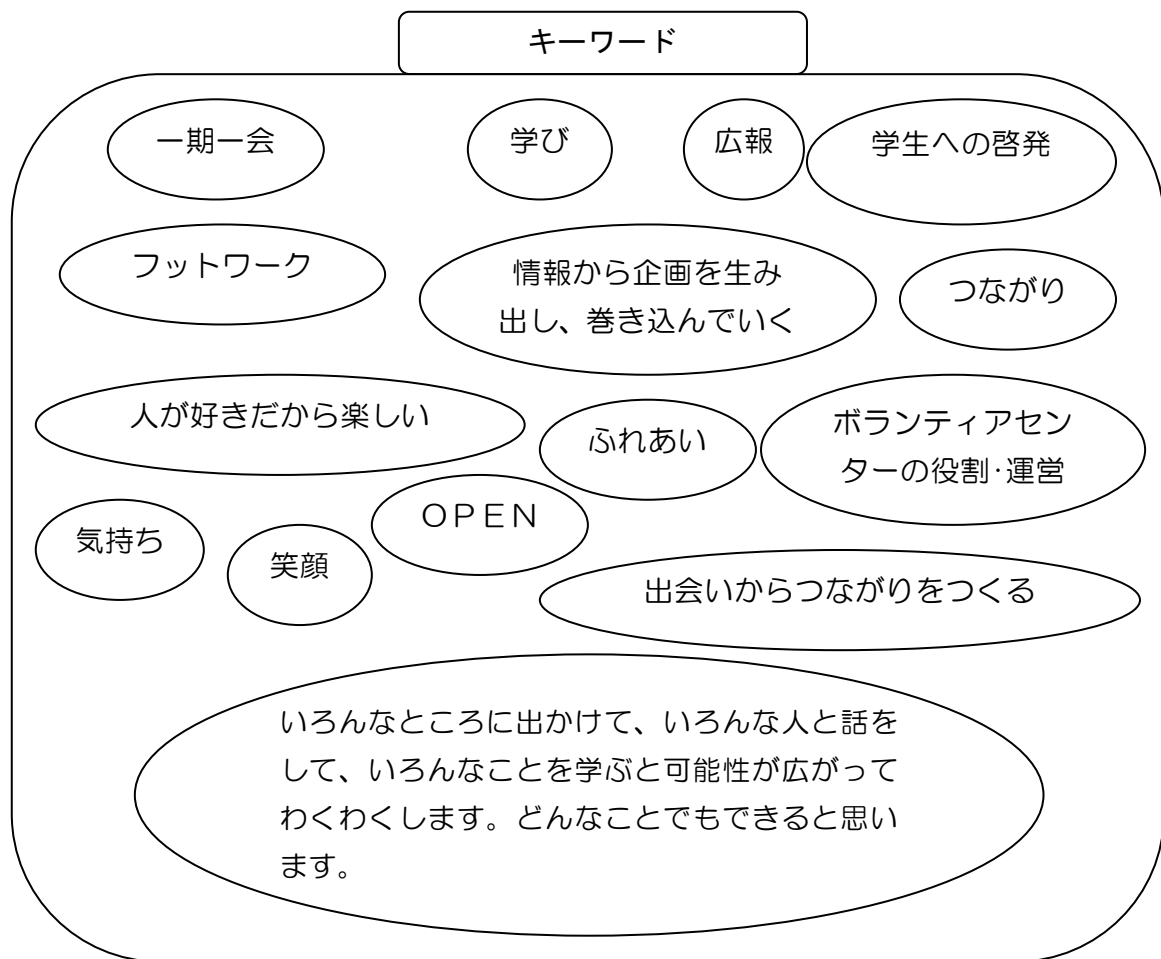


■ 話し合われたテーマ及び意見・提案（一部）

テーマ	意見・提案など
情報発信の仕方 ・サークル活動の 情報発信 ・ボランティア情 報の広報の仕 方 など	<ul style="list-style-type: none">○ ポスター・チラシ・広報誌の作成○ 掲示板・立て看板の活用○ ホームページの作成※ デザインなどを季節ごとに変える、ボランティア先に取材に行き、メッセージやスタッフを感じたことを掲載する○ 活動の目玉を紹介する○ 新入生オリエンテーションでPR○ 新学期のタイミングで説明会を開催する○ 授業の際にサークル紹介をさせてもらう○ 大学祭での展示・発表、プログラムの提供○ 「ボランティア」と宣伝するより、「楽しいこと」を宣伝してみる○ 友人に声をかけてみる
ボランティア活 動をはじめたき っかけ	<ul style="list-style-type: none">○ 自分の知らない世界を見て、体験したいと思った○ 中学校での職業体験が印象に残っていた○ 新入生勧誘のサークル冊子○ 実習がきっかけになった○ 買い物先で出会って○ いろいろな人に出会い、もっと様々な出会いがしたいと思った○ ボランティア活動するたびに違う発見がある○ 人が好き・人と関わるのが楽しい○ 考えて活動すると面白さ、感じることが多い

テーマ	意見・提案など
サークルメンバーのモチベーションを高めるためには	<ul style="list-style-type: none"> ○ やってみたいことは何かをぶつけ合ってみる。共感できたら一つになれる。 ○ 新しいことに挑戦してみる ○ 小さくても良いので企画をつくる ○ コミュニケーションをとる ○ 定期的に話し合いをする（週1回など） ○ メーリングリストで連絡を取り合う ○ 議事録を渡してどんな企画が進んでいるか知ってもらう ○ 個別に声をかけ思っていることを吐き出してもらう ○ 合宿 ○ 活動の楽しさ、やりがいをアピールする ○ 仕事を振ってみる ○ 活動に理念を持つ
活動後の評価はどう行うか	<ul style="list-style-type: none"> ○ 振り返りシートや会議で反省を行う ○ 目標を設定して、達成度を評価する
活動がマンネリ化している	<ul style="list-style-type: none"> ○ 他大学・他地域へ行き刺激をもらう ○ 新しい企画などをやってみる ○ アンケートをとる ○ 学生支援課と連携しながら活動を進行する
地域とのかかわりが少ない	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域に何があってどんな人がいるかを知ること。地域にニーズは必ずあります ○ 学生で地域の人との交流場をコーディネートしています（鍋、雪かきなど） ○ 市民活動センターでNGO・NPO等と関わったり、地域の方々と話ができる場を活用しています ○ 公民館や地域のボランティアセンターに話をする

最後にグループごとに、よりよい活動にするためのキーワードを挙げていただきました。



参加者アンケート

平成 20 年度学生ボランティア活動支援・促進の集い アンケート集計結果 総括表

- 平成 20 年 12 月 5 日 (金) 開催 (東京国際交流館 プラザ平成)
- 参加者人数 133 名
- 回答者数 121 名
- 回収率 91.0%

※ 割合(%)は、端数を四捨五入してあるため、内訳の合計が計に一致しないことがある

質問事項	回答	回答数	割合
F1 性別	①男	60	51.3%
	②女	57	48.7%
	未記入	4	—
F2 年齢	①10・20歳代	54	45.8%
	②30歳代	26	22.0%
	③40歳代	19	16.1%
	④50歳代	18	15.3%
	⑤60歳代	1	0.8%
	⑥70歳代以上	0	0.0%
	未記入	3	—
F3 所属機関(大学・団体等)の地域	①北海道	3	2.5%
	②東北	9	7.6%
	③関東甲信越(東京都以外)	30	25.4%
	④東京都	24	20.3%
	⑤東海・北陸	9	7.6%
	⑥近畿	19	16.1%
	⑦中国	9	7.6%
	⑧四国	4	3.4%
	⑨九州(沖縄含)	11	9.3%
	未記入	3	—

所属	質問事項	回答	回答数	割合
大学・短期大学・高等専門学校関係者	A 所属学校の種類	①大学	66	91.7%
		②短期大学	2	2.8%
		③高等専門学校	4	5.6%
		未記入	6	—
	B 設置者	①国立	17	22.1%
		②公立	9	11.7%
		③私立	51	66.2%
		未記入	1	—
	C 職種	①教員	17	22.1%
		②事務職員	55	71.4%
		③嘱託	3	3.9%
		④その他	2	2.6%
		未記入	1	—

所属	質問事項	回答	回答数	割合	
大学・短期大学・高等専門学校関係者	D 担当者としての経験年数	担当	①ボランティアの情報提供・相談窓口やボランティアセンター等	19	25.7%
			②ボランティアに関する授業や養成講座等	3	4.1%
			③学生課・厚生課等ボランティア担当	32	43.2%
			④学生のボランティアに関する課外活動団体の顧問	3	4.1%
			⑤その他	17	23.0%
			未記入	4	—
		経験年数	1年未満	14	23.3%
			1年以上2年未満	19	31.7%
			2年以上3年未満	13	21.7%
			3年以上4年未満	3	5.0%
			4年以上5年未満	1	1.7%
			5年以上6年未満	4	6.7%
			6年以上8年未満	5	8.3%
			8年以上10年未満	0	0.0%
10年以上15年未満	1		1.7%		
15年以上25年未満	0		0.0%		
25年以上	0	0.0%			
未記入	18	—			
ボランティア関係機関等関係者	E 所属団体の種類	①自治体（公社含む）	0	0.0%	
		②公益法人（財団・社団・社会福祉法人など）	3	42.9%	
		③NPO・NGO法人	3	42.9%	
		④地域・市民団体（法人化されていないもの）	0	0.0%	
		⑤その他	1	14.3%	
		未記入	0	—	
	F 勤務形態等	①常勤	5	83.3%	
		②非常勤（パート・アルバイト含む）	1	16.7%	
		③嘱託	0	0.0%	
		④ボランティア	0	0.0%	
		⑤その他	0	0.0%	
		未記入	1	—	
	G 担当者としての経験年数	1年以上2年未満	0	0.0%	
		2年以上3年未満	2	40.0%	
3年以上4年未満		1	20.0%		
4年以上5年未満		0	0.0%		
5年以上6年未満		0	0.0%		
6年以上8年未満		0	0.0%		
8年以上		2	40.0%		
未記入		2	—		
学生	H 内訳	①大学生	35	100.0%	
		②大学院生	0	0.0%	
		③短期大学生	0	0.0%	
		④高等専門学校生	0	0.0%	
		未記入	1	—	
	I 設置者	①国立	8	24.2%	
		②公立	6	18.2%	
		③私立	19	57.6%	
		未記入	3	—	

所属	質問事項	回答	回答数	割合
学生	J ボランティア活動 経験年数	1年未満	2	6.3%
		1年以上2年未満	4	12.5%
		2年以上4年未満	11	34.4%
		4年以上6年未満	10	31.3%
		6年以上10年未満	5	15.6%
		10年以上	0	0.0%
		未記入	4	—
	K ボランティア活動内容 (複数回答あり)	①国際ボランティア	7	9.7%
		②環境ボランティア	11	15.3%
		③地域ボランティア	22	30.6%
		④文化・教育ボランティア	13	18.1%
		⑤福祉ボランティア	15	20.8%
		⑥情報ボランティア(点訳・ノートテイク等)	4	5.6%
⑦活動経験なし		0	0.0%	

質問事項		回答	回答数	割合
Q1. 「学生ボランティア活動支援・促進の集い」 に参加して(全体的に)		①十分満足できた	43	43.9%
		②概ね満足できた	55	56.1%
		③あまり満足できなかった	0	0.0%
		④全く満足できなかった	0	0.0%
		未記入	23	—
Q2. 第1部について	SQ1. 講演について	①十分満足できた	31	27.4%
		②概ね満足できた	64	56.6%
		③あまり満足できなかった	18	15.9%
		④全く満足できなかった	0	0.0%
		未記入	8	—
	SQ2. パネルディス カッションについて	①十分満足できた	50	43.1%
		②概ね満足できた	62	53.4%
		③あまり満足できなかった	4	3.4%
		④全く満足できなかった	0	0.0%
		未記入	5	—
	SQ3. 時間について	①ちょうどよい	94	83.2%
		②長すぎる	8	7.1%
③短すぎる		11	9.7%	
未記入		8	—	
Q3. 第2部について	SQ2. 内容について	①十分満足できた	72	62.6%
		②概ね満足できた	39	33.9%
		③あまり満足できなかった	4	3.5%
		④全く満足できなかった	0	0.0%
		未記入	6	—
	SQ3. 時間について	①ちょうどよい	101	89.4%
		②長すぎる	6	5.3%
		③短すぎる	6	5.3%
		未記入	8	—
Q4. 開催時期について		①適当	103	87.3%
		②適当ではない	15	12.7%
		未記入	3	—
Q5. 会場について		①適当	96	82.1%
		②適当ではない	21	17.9%
		未記入	4	—

質問事項		回答	回答数	割合
Q6. 日程について		①半日	14	12.0%
		②1日	87	74.4%
		③1泊2日	15	12.8%
		④その他	1	0.9%
		未記入	4	—
Q7. 日本学生支援機構が、 今後も「学生ボランティア活動支援・促進の集い」を継続的に開催することについて	SQ1. 継続開催について	①毎年続けてほしい	95	82.6%
		②続けてほしいが、 毎年実施しなくてもよい	18	15.7%
		③実施する必要はない	0	0.0%
		④その他	2	1.7%
		未記入	6	—
	SQ2. 今後の参加について	①ぜひ参加したい	58	49.2%
		②できれば(機会があれば) 参加したい	59	50.0%
		③参加したくない	0	0.0%
		④その他	1	0.8%
		未記入	3	—

【 アンケート 】

本日は、お忙しいところご参加いただき、誠にありがとうございました。
今後の企画立案の参考といたしますので、アンケートのご協力をお願いいたします。

※ 該当する番号に1つだけ○をして回答ください。(F1～とQ1～は全員回答 A～Kは該当箇所回答)

F1. あなたの性別は。 1. 男 2. 女

F2. あなたの年齢は。

1. 10・20歳代 2. 30歳代 3. 40歳代 4. 50歳代 5. 60歳代 6. 70歳以上

F3. あなたの所属機関(大学・団体等)の地域は。

1. 北海道 2. 東北 3. 関東甲信越(東京都以外) 4. 東京都 5. 東海・北陸
6. 近畿 7. 中国 8. 四国 9. 九州(沖縄含)

*** 大学・短期大学・高等専門学校教職員の方のみお答えください。**

A 1. 大学(大学・短期大学併設で両方の校名で出席の場合を含む) 2. 短期大学 3. 高等専門学校

B 1. 国立 2. 公立 3. 私立

C 1. 教員 2. 事務職員 3. 嘱託 4. その他()

D 担当者としての経験年数(現在の担当に限定し、該当番号1つ○をして担当暦も回答ください)

1. ボランティアの情報提供・相談窓口やボランティアセンター等の担当教職員 (担当歴 約 年)
2. ボランティアに関する授業や養成講座等の担当教職員 (担当歴 約 年)
3. 学生課・厚生課等ボランティア担当部署の担当教職員 (担当歴 約 年)
4. 学生のボランティアに関する課外活動団体の顧問教職員 (担当歴 約 年)
5. その他() (担当歴 約 年)

*** ボランティア関係機関等関係者の方のみお答えください。**

E 1. 自治体(公社含む) 2. 公益法人(財団・社団・社会福祉法人など)

3. NPO・NGO法人 4. 地域・市民団体(法人化されていないもの)

5. その他()

F 1. 常勤 2. 非常勤(パート・アルバイト含む) 3. 嘱託 4. ボランティア

5. その他()

G 上記担当者としての経験年数 (担当歴 約 年)

*** 学生の方のみお答えください。**

H 1. 大学生 2. 大学院生 3. 短期大学生 4. 高等専門学校生

I 1. 国立 2. 公立 3. 私立

J ボランティア活動経験年数(大学等入学以前からの経験年数も通算してください)

(経験年数 約 年)

K ボランティア活動内容について(現在活動しているボランティアを、分野別で該当番号に○ 複数回答可)

1. 国際ボランティア 2. 環境ボランティア 3. 地域ボランティア 4. 文化・教育ボランティア
5. 福祉ボランティア 6. 情報ボランティア(点訳・ノートテーカー等) 7. 活動経験なし

裏面も回答願います

Q 1. 「学生ボランティア活動支援・促進の集い」に参加して（全体的に）

1. 十分満足できた 2. 概ね満足できた 3. あまり満足できなかった 4. 全く満足できなかった

* 3、4の場合は理由をご記入ください。

()

Q 2. 第1部について

SQ 1. 講演はどうでしたか。

1. 十分満足できた 2. 概ね満足できた 3. あまり満足できなかった 4. 全く満足できなかった

* 進行・内容等お気づきの点がありましたらご記入ください。

()

SQ 2. パネルディスカッションはどうでしたか。

1. 十分満足できた 2. 概ね満足できた 3. あまり満足できなかった 4. 全く満足できなかった

* 進行・内容等でお気づきの点がありましたらご記入ください。

()

SQ 3. 時間的にはどうでしたか。

1. ちょうどよい 2. 長すぎる 3. 短すぎる (2, 3の場合、適当と思われる時間⇒__時間)

Q 3. 第2部について

SQ 1. 参加された分科会は ⇒ 第__分科会

SQ 2. 参加された分科会はどうでしたか。

1. 十分満足できた 2. 概ね満足できた 3. あまり満足できなかった 4. 全く満足できなかった

* 進行・内容等お気づきの点がありましたらご記入ください。

()

* 今後、分科会で取り上げたほうが良いテーマ・内容等がありましたらご記入ください。

()

SQ 3. 時間的にはどうでしたか。

1. ちょうどよい 2. 長すぎる 3. 短すぎる (2, 3の場合、適当と思われる時間⇒__時間)

Q 4. 開催時期はどうでしたか。

1. 適当 2. 適当ではない (2の場合、適当と思われる時期 ⇒__月頃)

Q 5. 会場はどうでしたか。

1. 適当 2. 適当ではない

2の場合、適当でないと思われる理由をご記入ください

()

Q 6. 日程はどのくらいが適当でしょうか。

1. 半日 2. 1日 3. 1泊2日 4. その他 ()

Q 7. 今後も「学生ボランティア活動支援・促進の集い」を継続的に開催することについて

SQ 1. あなたは、今後もこのような「集い」を続けてほしい、と思いますか。

1. 毎年続けてほしい 2. 続けてほしいが、毎年実施しなくてもよい 3. 実施する必要はない

4. その他 ()

SQ 2. あなたは、今後もこのような「集い」に参加したいと思いますか。

1. ぜひ参加したい 2. できれば（機会があれば）参加したい 3. 参加したくない

4. その他 ()

※ その他ご意見、ご要望、ご感想等ございましたらご記入ください。

[]

ご協力ありがとうございました。気をつけてお帰りください。

参加者内訳

◆ 平成 20 年度「学生ボランティア活動支援・促進の集い」出席者内訳

(人)

	男	女	計
大学・短期大学等教職員	53	33	86
ボランティア関係機関・団体	3	6	9
学 生	12	26	38
合 計	68	65	133

◆ 大学・短期大学等内訳（教職員・学生）

(人)

		男	女	計
大 学	国 立	18	9	27
	公 立	6	10	16
	私 立	36	37	73
	小 計	60	56	116
短期大学	私 立	2	2	4
	小 計	2	2	4
高等専門学校	国 立	3	1	4
	小 計	3	1	4
合 計		65	59	124

◆ 分科会別内訳

(人)

	男	(学生数)	女	(学生数)	計	(学生数)
第1分科会	11	(0)	5	(0)	16	(0)
第2分科会	21	(0)	15	(1)	36	(1)
第3分科会	19	(4)	18	(5)	37	(9)
第4分科会	7	(3)	6	(0)	16	(3)
第5分科会	0	(6)	20	(19)	27	(25)
全体会のみ	0	(0)	1	(0)	1	(0)
合 計	68	(13)	65	(25)	133	(38)

参加大学・機関等一覧

大学・短期大学・高等専門学校

82校・124名

室蘭工業大学	明海大学	金城学院大学
北見工業大学	千葉経済大学	中部大学
弘前大学	千葉工業大学	藤田保健衛生大学
宮城教育大学	亜細亜大学	名城大学
秋田大学	上野学園大学	京都外国語大学
山形大学	共立女子大学・共立女子短期大学	京都橘大学
横浜国立大学	慶應義塾大学	ノートルダム女学院
新潟大学	恵泉女子学園大学	京都文教大学
金沢大学	國學院大學	大阪経済大学
静岡大学	駒沢女子大学	関西大学
兵庫教育大学	実践女子大学	神戸常磐大学
神戸大学	芝浦工業大学	広島経済大学
岡山大学	上智大学	広島国際大学
山口大学	聖心女子大学	聖マリア学院大学
愛媛大学	日本女子大学	日本赤十字九州国際看護大学
佐賀大学	日本女子体育大学	福岡大学
宮崎大学	法政大学	活水女子大学
岩手県立大学	明治大学	名桜大学
国際教養大学	明治学院大学	鎌倉女子大学短期大学部
神戸市外国語大学	明星大学	山梨学院短期大学
和歌山県立医科大学	鎌倉女子大学	浜松学院大学短期大学部
山口県立大学	相模女子大学	鳥取短期大学
長崎県立大学	田園調布学園大学	一関工業高等専門学校
宮崎公立大学	東洋英和女学院大学	木更津工業高等専門学校
札幌大学	フェリス学院大学	鈴鹿工業高等専門学校
筑波学院大学	新潟工科大学	阿南工業高等専門学校
国際医療福祉大学	岐阜経済大学	
駿河台大学	聖隷クリストファー大学	

ボランティア関係団体等

7団体・9名

サークルアドバンス	日野市社会福祉協議会
社会福祉法人世田谷ボランティア協会	特定非営利活動法人ユースビジョン
西東京ボランティア・市民活動センター	財団法人横浜市青少年育成協会
日本科学未来館	

平成 20 年度

「学生ボランティア活動支援・促進の集い報告書」

平成 21 年 3 月

独立行政法人日本学生支援機構 学生生活部学生支援事業課

〒135-8630 東京都江東区青海 2-7-9

TEL 03-5520-6171

FAX 03-5520-6049

E-mail career@jasso.go.jp

URL <http://www.jasso.go.jp>